報会
特攻
平成16年11月

第61号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090
ＦＡＸ　03(3432)5567

編集人　田中賢一
発行人　菅原道熙

世田谷特攻観音年次法要

平成16年9月23日

遺族五一名、来賓及び会員二四〇名参加し次の式次第で行われた。

司会　乗兼英史

梵鐘点打
大衆着座
式衆入道　金竜山浅草寺一山大導師
国歌斉唱
山主願文　観音寺住職　大田賢照
読　経
祭　文　奉賛会長　山本卓真
追悼の辞　遺族代表　中村家久
　　戦友代表　田中賢一
　　熊本哲之
世田谷区長挨拶
献　歌　世田谷コールエーデ合唱団
献　吟　石橋一歌　笛　逢坂竜信
奉納演奏　世田谷区民吹奏楽団
全員合唱　海ゆかば
ラッパ献奏　海軍軍装会ラッパ隊
焼　香　遺族　来賓　会員
式衆退堂　池前にて読経

奉賛会長祭文の要点

最初の航空特攻隊が出撃してから六十年が経過しました。関行男大尉率いる五機の敷島隊がその嚆矢で、昭和十九年十月二十五日、レイテ沖の敵空母に体当りしてこれを轟沈させ散華されました。関大尉は戦局急を告げ国家の命運旦夕に迫るなか、母と妻を残し祖国日本の為に生還を期さない特別攻撃を敢行されました。

以後終戦に到るまで五八二五名の優秀な青年が特攻烈士として後に続きました。中には十七才の童顔の遺影を残された方もあり、また特攻隊員の遺された歌や遺言は見る者の心を今尚激しく打ち続けています。航空特攻に加えて艦船特攻、敵地に強行着陸する空挺特攻、中戦車をもって重戦車に体当りする特攻と、方策は多岐にわたり、戦域もフィリピンから本土上空、南西海域満州へと拡大し、多くの特攻烈士が若い命を捧げられました。

こうした烈士達の崇高な精神は戦後日本の再建にも多大の影響を与え、特に国体維持への無言の強力な基盤になったと信じます。

茲に特攻烈士のご霊前に立ち深い敬意と謝意を捧げ、ご遺族の平安を切に祈念すると共に、戦後日本の精神的再建未だ成らざるを思い、私共は日本の健全化に更なる努力を続ける所存でございます。英霊のご照覧ご加護をお願い申し上げます。

次は**遺族代表中村家久**の追悼文の要点を記述する。

神風特別攻撃隊第三筑波隊長中村秀正の弟でございます。

皆様がひたすら祖国の安泰と家族の幸福を祈りながら散華されて六十年になります。

この戦争で示された日本民族の能力と資質は、白人による人種差別が根拠のないことを立証し、アジア諸民族の覚醒と独立を促しました。

焦土から立直つ国民は、経済の再建と発展に精進し、空前の平和と繁栄を享受しております。経済に比べ立ち遅れ著しかった精神面でも、ようやく正しい歴史の見方考え方が普及しはじめ、我が国本来の文化伝統を尊重し、憲法教育基本法を見直して、真の独立を達成しようとの気運が高まっておりますこれらすべてが皆様の尊い犠牲の上に築かれたことを思い、深く感謝申し上げます。

母が生前私に申しておりましたのは、兄はこどもがおりませんのであなたがお祭りを絶やさないように、ということでございました。ここ大田賢照様の世田谷山観音寺で毎年法要が営まれ、皆様を供養していただきますことにつきまして、亡き母は心から喜んでいることと存じます。

目次

世田谷特攻観音年次法要　……1
靖国社頭の掲示①　……4
ある従軍カメラマンと特攻隊……9
偵察将校の話　……12
「梯梧の塔」について……13
神風特攻を偲んで　……14
特攻隊員荒木幸雄を偲ぶ集い……16
「海ゆかば」の出所……17
特操の像遊就館に展示　……18
高野山にある空挺部隊の墓　……19
中野学校出身の義烈空挺隊員　……20
特攻艦隊戦艦大和の最後　……22
浅間山の噴火に思う　……25
今期の戦史⑤ガ島の攻防　……26
協会より……30
新入会員……31
台湾等特攻発進基地巡拝（下）……35

私ども遺族はあらためて皆様を誇りに思うとともに、皆様の気高い精神を子や孫に誤りなく正しく伝えていくことをお誓い申し上げます。

ついで**戦友代表**として田中賢一が捧げた一文は次の通り。

特攻観音に応う

世田谷の観音堂に　斎き祀る特攻の士
み國に嵐迫る時　我と我が身を擲ちぬ
たらちねよはらからよ　御身安かれと
故郷の青き山　幼き日　などか忘れん
思いはあれど　捨去らん　見果てぬ夢
今ぞ我往かずんば　この国如何んせん
建国二千六百年　父祖の築きし我祖国
祖霊鎮まるこの山河　などか汚すべき
護るべし昭和の御代に　我等の手もて

沖縄特攻攻撃で武克飛行隊長広森中尉は言う。愈々明朝特攻攻撃だ、何時ものように俺について来い。次のことだけはお互いに約束しよう。今度生まれ変わったら、それが蛆虫であろうとも国を愛する誠心だけは失わないようにしよう。

顧みるに何ぞ衰えたるや　現今の世情
大和心取戻さずんば　亡国の民たらん
若人よ目覚めよ　同じ日本人ならずや
年ごとにわれは老ゆれどみ仏は
とわに変らぬ若き武者ぶり

献　歌　世田谷コールエーデ合唱団

はるかな友・赤とんぼ・故郷

故　郷

兎追いしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

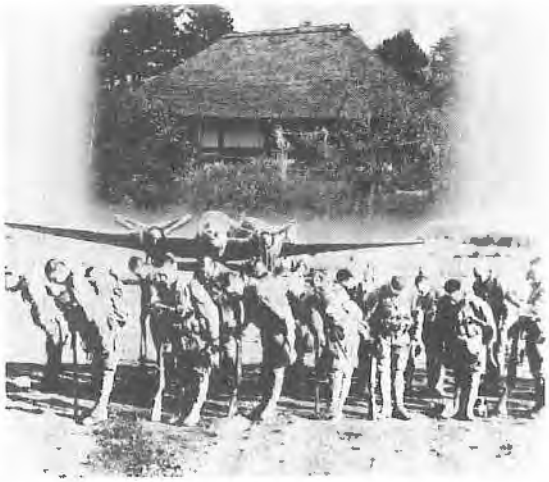
如何にいます父母
恙なしや友がき
雨に風につけても
思いいずる故郷

こころざしをはたして
いつの日にか帰らん
山はあおき故郷
水は清き故郷

参列者の琴線に触れるこのしらべ

特攻の烈士も出撃の前夜脳裏に浮かんだであろう故郷。中天の月を仰ぎ、故郷で見た月。今この月は故郷を照らしているであろう。

20年5月24日義烈空挺隊の隊員は健軍出撃にあたり、各機ごと郷里に向かい別れを告げた。



献　奏　トランペット海ゆかば

世田谷区民吹奏楽団

献　吟　吟　石橋一歌
笛　逢坂竜信

海上挺進第十七戦隊山本正記
昭和二十年二月十日
マニラ湾上にて戦死

靖国の社にしづまる武士の
み霊に続く若桜かな

第一神風特攻隊山桜隊中瀬清久
昭和十九年十月二十五日
ダバオ海域にて戦死

海征かば水漬く屍と聞くものを
空征く我は白雲と散る

観音寺の本堂を借りて特攻の油絵の展示を行った　主として故松本武仁画伯のもの

焼香の列

特攻観音二題

年次法要に列し

秋韻ひそかに雲一つ
梵鐘流る世田谷の
大慈悲溢る観音に
心ぞ通う特攻隊
ますらをが悲しき命つみかさね
つみかさねまもる大和島根を
霜鬢禿髪額突けば
瞼に浮ぶ面影は
明眸皓歯眉秀で
匂うが如き若武者よ
花負いて空うち征かん雲染めん
屍悔いなく吾ら散るなり
聞け平成の若人よ
大和島根の弥栄は
後に続くを信じつつ
逝きにし人の形見なれ

花負いての歌は、レイテに降下した挺進第三聯隊の誰かが、発進基地アンフェレスの宿舎の壁に書き遺してあったもの。

特攻観音年次法要

観音堂の　鐘を撞く
渾身の力をこめて
撞木が鐘に衝る勢に
特攻機突入の思いがある
嫋々とした余韻は
神となった特攻隊員の清浄な心
杜の梢に　蝉の声を聞く
何年も地に潜み
世に出たら　木のつゆを吸い
やがて死んでゆく
高潔なその生涯
特攻隊員の心か

観音様の姿　柔和なその容貌
ある写真に見た
出撃前の少年隊員の顔を憶う
あの人達　既に観音様だったのか

靖国社頭の掲示①

靖国神社の社頭に御祭神の遺書・遺詠や御遺族の書簡等が掲示されるのは昭和三十五年から始まり、その文面は「英霊の言の葉」と題する本で逐次出版きれている。その中で特攻戦死者のものを順を追って紹介する。

愛児への便り

海軍大尉　植村真久命
神風特別攻撃隊
昭和十九年十月二十六日
比鳥海域にて戦死
東京都出身　立教大学卒
二十五才

素子、素子は私の顔をよく見て笑いましたよ。私の腕の中で眠りもしたし、またお風呂に入ったこともありました。素子が大きくなって私のことを知りたい時は、お前のお母さん、佳代伯母様に私のことをお聴きなきい。

私の写真帳もお前の為に家に残してあります。素子といふ名前は私がつけたのです。素直な、心の優しい、思ひやりの深い人になるやうにと思って、お父様が考へたのです。

私は、お前が大きくなって、立派な花嫁さんになって、仕合せになったのを見届けたいのですが、若しお前が私を見知らぬまま死んでしまっても、決して悲しんではなりません。

お前が大きくなって、父に食いたい時は九段へいらっしゃい。そして心に深く念ずれば、お父様のお顔がお前の心の中に浮かびますよ。父はお前は幸福ものと思います。生まれながらにして父に生きうつしだし、他の人々も素子ちやんを見ると真久さんに会っている様な気がするとよく申されていた。またお前の伯父様、伯母様は、お前を唯一つの希望にしてお前を可愛がって下さるし、お母さんも亦、御自分の全生涯をかけて只々素子の幸福をのみ念じて生き抜いて下さるのです。必ず私に万一のことがあっても親なし児などと思ってはなりません。父は常に素子の身辺を護って居ります。優しくて人に可愛がられる人になって下さい。

お前が大きくなって私の事を考え始めた時に、この便りを読んで貰ひなきい。

昭和〇月吉日
植村素子へ

追伸、素子が生まれた時おもちやにしていた人形は、お父さんが頂いて自分の飛行機のお守りにして居ります。だから素子はお父さんと一緒にゐたわけです。素子が知らずにゐると困りますから教へて上げます。

［昭和三十五年八月～十月社頭掲示］

最後の日記

海軍大尉　市島保男命
神風特別攻撃隊第五昭和隊
昭和二十年四月二十九日
沖縄東南海上にて戦死
東京都出身早稲田大卒二十三才

ただ命を待つだけの軽い気持である。

隣の室で「誰か故郷を思はざる」をオルガンで弾いてゐる者がある。平和な南国の雰囲気である。徒然なるままにれんげ摘みに出かけたが、今は捧げる人もなし。

梨の花とともに包み、僅かに思い出をしのぶ。夕闇の中を入浴に行く。

隣の室で酒を飲んで騒いでゐるが、それもまたよ

し。俺は死するまで静かな気持でゐたい。人間は死するまで精進しつづけるべきだ。ましてや大和魂を代表するわれわれ特攻隊員である。その名に恥ぢない行動を最後まで堅持したい。

俺は、自己の人生は、人間が歩み得る最も美しい道の一つを歩んできたと信じている。

精神も肉体も父母から受けたままで美しく生き抜けたのは、神の大いなる愛と私を囲んでゐた人びとの美しい愛情のおかげであった。今限りなく美しい祖国に、わが清き生命を捧げ得ることに大きな誇りと喜びを感ずる。

［昭和三十七年三月社頭掲示］

陣中日記

海軍少佐　中西斎季命
神風特別攻撃隊第九建武隊
昭和二十年四月二十九日
沖縄北方海域で戦死
和歌山県出身　慶応大卒　二十七才

三月〇日
硫黄島陥落。日本兵玉と散る。噫！散る桜、残る桜も散る桜。

三月〇日
死は決して難くはない。ただ死までの過程をどうして過すかはむづかしい。これは実に精神力の強弱で、ま白くもなれば汚れもする。死まで汚れないままでありたい。

四月〇日
人間死ぬ死ぬと口にで出せるうちは本当に死といふ観念が迫つて来ない。いよいよ明日突込むといふ日になってはじめて死ぬのかといふ気になる。いやそれでもまだ何か他人事のやうな気がしているが……しかし明日は突入する。さうすればたしかに死ぬ。

［昭和三十八年二月社頭掲示］

両親と面会

海軍大尉　安達卓也命
神風特別攻撃隊第一正気隊
昭和二十年四月二十八日
沖縄方面にて戦死
兵庫県出身　二十三歳

遥かな旅の疲れの見える髪と眼のくぼみを、私は伏し拝みたい気持ちで見つめた。私の為に苦労をかけた老いが、父母の顔にありありと額の皺にみられるような気がした。何も思う事が云えない。ただ表面を滑っているにすぎないようなな皮相的な言葉が二言、三言口を出ただけであり、剰へ思う事とは全然反対の言葉すら口に出ようとした。ただ時間の歩みのみが気になり、見つめる事、眼でつたわり合う事、眼は口に出し得ない事を云って呉れた。

母は私の手を取って、凍傷をさすって下さった。私は入団以来始めてこの世界に安らかに憩い、生まれたままの心になってそのあたたかさをなつかしんだ。私はこの美しい父母の心温い愛あるが故に君の為に殉ずることが出来る。死すともこの心の世界に眠ることが出来るからだ。僅かに口にした母の心づくしは、私の生涯で最高の美味だった。涙と共にのみ込んだ心のこもった寿司の一片は、母の愛を口移しに伝えてくれた。

「母上、私の為に作って下さったこの愛の結晶をたとえ充分戴かなくとも、それ以上の心の糧を得ることが出来ました。父上の沈黙の言葉は、私の心にしっかりと刻みつけられています。これで私は父母と共に戦うことが出来ます。死すとも心の安住の世界を持つことが出来ます。」私は心からそう叫び続けた。

戦の場、それはその美しい感情の試煉の場だ。死はこの美しい愛の世界への復帰を意味するが故に私は死を恐れる必要はない。ただ義務の完遂へ邁進するのみだ。

一六〇〇、面会時間は切れた。再び団門をくぐって出て行かれる父母の姿に、私は凝然として挙手の礼を送った。

［昭和三十八年三・四月社頭掲示］

遺　書

海軍大尉　溝口幸次郎命
神風特別攻撃隊第一神雷爆撃隊
昭和二十年六月二十一日
沖縄方面にて戦死
静岡県出身　中央大学　二十二歳

（一）
美しい祖国は、おほらかな益良夫を生み、おほらかな益良夫は、けだかい魂を祖国に残して、新しい世界へと飛翔し去る。

（二）
「現在の一点に最善をつくせ」

「只今ばかり我が生命は存するなり」とは私の好きな格言です。生れ出でてより死ぬる迄、我等は己の一秒一刻に依って創られる人生の彫刻を、悲喜善悪のしゅらぞうをきざみつつあるのです。私は一刻が恐ろしかった。一秒が重荷だった。もう一歩も人生を進むには恐しく、ぶっ倒れそうに感じたこともあった。しかしながら、私の二十三年間の人生は、それが善であろうと、悪であろうと、悲しみであろうと、喜びであろうとも、刻み刻まれて来たのです。私は、私の全精魂をうって、最後の人魂に努力しなければならない。

(三)

私は誰にも知られずにそっと死にたい。無名の幾万の勇士が大陸に大洋に散っていったことか。私は一兵士の死をこの上なく尊く思ふ。

[昭和二十八年七・八月社頭掲示]

死の覚悟

海軍少佐　古川正崇命
神風特別攻撃隊振天隊
昭和二十年五月二十九日
沖縄にて戦死
奈良県出身　大阪外語　二十四歳

人間の迷ひは実に沢山ありますが、死に対する程、それが深刻で悟り切れないものはないと思ひます。これだけはいくら他人の話を聞いても、本を読んでも結局自分一人の胸に起る感情だからです。私も軍隊に入る時は、それは決死の覚悟で航空隊を志願したのですが、日と共にその悲壮な謂はば自分で自分の興奮に溺れてゐるやうな、そんな感情がなくなって来てやはり生きてゐるのは何にも増して換へ難いものと思ふやうになって来たのです。その半面、死ぬ時が来たなら、それは誰だって死ねるさ、と云ふ気持を心の奥に常に持つやうになります。然し本当に死ねると云ってゐても、いざそれに直面すると心の動揺はどうしてもまぬがれる事は出来ません。私の今の立場を偽りなく申せば、此の事なのです。私達は台湾進出の命を受けてジャカルタを出ました。いよいよ死なねばならぬ、さう思うと戦にめぞむ湧き上る心より、何か死に度くない気持ちの方が強かったりするのです。わざわざジャワから沖縄まで死ぬ為の旅を続けねばらぬ、その事が苦痛にも思へるのです。

求　道

戦死する日も迫って、私の短い半生を振り返ると、やはり何か寂しさを禁じ得ない。死と云ふ事は日本人にとってはさう大した問題ではない。その場に直面すると誰もがそこには不平もなしに飛び込んでゆけるものだ。然し私は、私の生の短かさをやはり寂しむ。生きると云ふ事は、何の気なしに生きてゐる事が多いが、やぱり尊い。何時かは死ぬに決まってゐる人間が、常に生に執着を持つと云ふ事は所謂自然の妙理である。神の大きい御恵みが其処にあらはされてゐる。子供の無邪気さ、それは知らない無邪気さである。哲人の無邪気さ、それは悟り切った無邪気さである。そして道を求める者は悩んでゐる。死ぬ為に指揮所から出て行く搭乗員、それは実際神の無邪気さである。

和　歌

雲湧きて流るゝはての青空のその青の上わが死に所
ド着よりすべて換ゆれば新らしき我が命も生れ出づるか
あと三時間のわが命なり只一人歌を作りて心を静む
ふるさとの母の便りに強き事云ひてはをれど老ひし母はも

[昭和二十八年九・十月社頭掲示]

靖國の社頭で

海軍少佐　永尾　博命
神風特別攻撃隊第三草薙隊
昭和二十年四月二十八日
沖縄近海にて戦死
佐賀県西南学院出身　二十二歳

一、生を享け二十二年の長い間、小生を育くまれた父母上に御禮申上げます。
一、親不幸の数々お許し下さい。
一、小生の身体は父母のものであり、父母のものでなく、大皇陛下に捧げたものであります。
小生入隊後は無きものと御覚悟下さい。
一、小生も良き父上、良き母上、良き妹二人を持ち心おきなく大空の決戦場に臨むことが出来ます。
一、父上も好子、壽子を小生と心得御育み下さい。
一、母上、父上の事末永く呉々も御願ひ申上ます。
一、父、母上の、また妹の御健康をお祈り致します。

父さん　大事な父さん
母さん　大事な母さん
永い間、色々とお世話になりました。
好子、壽子をよろしくお願ひ致します。

靖國の社頭でお目にかゝりませう
では参ります。お身体お大事に。
［昭和二十九年二月社頭掲示］

海軍少佐仁科関夫命の母の手記
「最後の帰省」

海軍少佐　仁科関夫命
回天特別攻撃隊菊水隊
昭和十九年十一月二十日
西カロリン島方面にて壮烈なる戦死
長野県南佐久郡前山村出身　二十二歳

あの子ぼよく祭日に帰って来る。今日は明治節、なんだか関夫が帰って来るような気がしてならない。朝から気もそぞろで落つかぬ。お昼になった、あの子の好きなものを作ってもみた。座敷を整頓したり、寝具を干してみたりして、あてのない人を持っていたが、晩になっても姿をみせぬ…。もうこの世にはいないかも知れぬと考えたり、また正月にでもひょっこり帰ってくるかも知れぬ、と希望をもってみたりしながら、床についたのは十時すぎてからだった。

いつかとろりとしたと思うころ、強くベルが鳴った。あっ！関夫のならし方だ。はじかれるように飛起きて玄関に出た。暗い外に立っているわが子を見たとき、無事に生きていてくれたという喜びで胸が一杯になった。そのころ神風特別攻撃隊のことが新聞やラジオに発表されたばかりだったので、いろいろ話している間に、何気なく、聞いてみた。

「若い人が飛行機で敵艦に体当りして、死んでゆくなんて、本当にもったいないことだね。必死でなくても何とか勝つ方法がありそうなものにね」関夫は何とも答えなかった。自分が今必死の作戦を前にして、親に最後の別れに来ているなどということは、おくびにも出さなかった。

次の朝、早く起きた関夫は、湯殿で頭から何杯も水をかぶり乍ら、何事かを祈念しているようであった。ボサボサに伸びた髪が、ことさらに気になるのも女親のせいだろうか。

「忙しくて散髪する暇もないの」……無言、「恐ろしい顔になったものね、疲れているの」やはり無言、ずっと前に帰って来た際、結婚してもよいなどといっていた事を思い出したので、話をしてみたところ、関夫は何食はぬ顔で「前にいったことは、取り消し、取り消し、みな取消し、今はとても忙しいので、次に帰って来た時にゆっくり話しましょう」といった。

この日は運悪く父は田舎に行っていてとうとう会えなかった。最後の食事があまり進まないので「今日はなぜ少ししか食べないの」「おかずが沢山あるのでね、それにぼくも大分大きくなったんだから、そう何時までも大食いぢゃないんだよ」と笑いながら云った。しかしお酒はうまそうに飲み「お母さんも」と杯を出し、二人で楽しく汲み交わした。これが、関夫にとってはせめてもの別れの杯のつもりだったのだろう。

いくら腹がきまっていても、母を目の前にしては、さすがに胸がせまり食事も、ノドを通らなかったのではなかろうか。

私が駅までぜひ送りたいといったが、門前でいいよといい、母がつくった、握飯を風呂敷に包んで、手にぶらさげ、ゆったりした足どりで去って行った。

どこから来て、何処へ行くともいわないで行ってしまった、わが家の桃太郎は待てども待てども鬼ガ島から帰って来ない。

［昭和二十九年三月社頭掲示］

海底の遺書

昭和十九年九月六日、徳山湾大津基地に於て水中特攻兵器「回天」の潜行訓練中樋口孝少佐と共に従容として最後を遂げられた黒木博司海軍少佐が回天第一号海底突入事故報告と題し、状況、処置、経過、所見と区分された詳細に亘る遺書の最後の部分である。

辞世
国を思ひ死ぬに死なれぬ益良雄が友々よびつ死してゆくらん

一、二〇〇壁書ス
天皇陛下万歳
大日本　万歳
帝国海軍回天万歳
一九、九、六、二二〇〇
海軍大尉　黒　木　博　司
呼吸苦シク　思考ヤヤ不明瞭
手足ヤヤシビレタリ。
〇四〇〇　死ヲ決ス　心身爽快ナリ　心ヨリ樋口大尉ト万歳ヲ三唱ス
死せんとす益良男子のかなしみは留め護らん魂の空しき

所見万事ハ急務所見乃至急務靖献ニ在リ同志ノ士希クハ一読、緊急ノ対策アランコトヲ。
一九一九一七〇四〇五絶筆
樋田大尉ノ最後従容トシテ見事ナリ　我又彼ト同ジクセン
〇四四五　君が代斉唱　神州ノ尊　神州ノ美　我今疑ハズ
莞爾トシテユク万歳
〇六〇〇猶二人生存ス　相約シ行ヲ共ニス万歳」
［昭和三十九年五月社頭掲示］

遺言状

海軍少佐　吹野　匡命
神風特別攻撃隊旭日隊
昭和二十年一月六日
比島方面にて戦死
鳥取県淀江町出身　京都大学卒　二十六歳

母上様

十九年十二月二十一日　匡

私は永い間本当に御厄介ばかりおかけして参りました。色々の不孝の上に今又母上様の面倒を見る事もなしに先立つ不孝をお許し下さい。

昨秋、私が海軍航空の道を選んだ事は、確かに母上様の胸を痛めた事と思ひます。常識的に考へて、危険性の少い道は他に幾等もありました。

国への御奉公の道に於ては、それでも充分果されたかも知れません。併し、この日本の国は、数多くの私達の尽きざる悲しみと歎きを積み重ねてこそ立派に輝かしい栄えを得て来たし、又今後もこれあればこそ栄えて行く国なのです。私の母上はこの悲しみに立派に堪へて、日本の国を立派に栄えさせてゆく強い母の一人である事を信じたればこそ、私は何の憂ひもなしにこの光栄ある道を進み取る事が出来ました。私が、いささかなりとも国に報ゆる所のある益良雄の道を進み得たのも、一に母上のお蔭であると思ひます。

母上が、私をしてこの光栄ある海軍航空の道に於て、輝かしい死を、そして、いささかの御奉公を尽させて下さったのだと誇りをもって言ふ事が出きます。

美しい大空の白雲を墓標として、私は満足して、今、大君と愛する日本の山河とのために死んで行きます。

［昭和三十九年七月社頭掲示］

出撃に際して倫子、生れる愛子へ

陸軍少佐　渋谷健一命
特別攻撃隊第四十六振武隊隊長
昭和二十年六月十一日
沖縄方面海域にて戦死
山形県出身　三十一歳

父は選ばれて攻撃隊長となり、隊員十一名、年齢僅か二十才に足らぬ若桜と共に決戦の先駆となる。死せずとも戦に勝つ術あらんと考うるは常人の浅はかなる思慮にして、必ず死すと定まりて、それにて全軍敵に総体当りを行ひ、尚且つ、現戦局の勝敗は神のみぞ知り給ふ。真に国難といふべきなり。父は死にても死するにあらず、悠久の大義に生るなり。

一、寂しがりやの子に成るべからず母あるにあらずや、父も又幼少にして父母を病に亡したれど決して明るさを失はずに成長したり。まして戦に出て壮烈に死すと聞かば日の本の子は喜ぶべきものなり。父恋しと思はば、空を視よ、大空に浮ぶ白雲にのりて父は常に微笑で迎ふ。

二、素直に育て、戦勝つても国難は去るにあらず、世界に平和がおとづれて万民太平の幸をうけるまで懸命の勉強をすることが大切なり。二人仲良く母と共に父の祖先を祭りて明るく暮らすは父に対して最大の考養なり。

父は飛行将校として栄の任務を心から喜び、神明に真の春を招来する神風たらんとす。皇恩の有難さを常に感謝し世は変るとも忠孝の心は片時も忘るべからず。

三、御身等の母はまことに良き母、父在世中は飛行将校の妻は数多くあれども、母程日本婦人としての覚悟ある者少し。父は常に感謝しありたり。

戦時多忙の身にして真に母を幸福にあらしめる機会少く、父の心残りの一つなり。御身等成長せし時には父の分まで母に孝養つくさるべし。之父の頼みなり現時敵機爆撃の為大都市等にて家は焼かれ、父母を亡ひし少年少女数限りなし。之を思へば父は心痛極りなし。御身等は母、祖父母に抱かれて真に幸福に育ちたるを忘るべからず。

書置く事は多けれど、大きくなったる時に良く母に聞き母の苦労を知り決して我儘せぬやう望む。

［昭和四十年五月社頭掲示］

ある従軍カメラマンと特攻隊

田中　賢一

その人の名は小柳次一と言う、この人は終戦まで八年間、陸軍の報道班員として中国大陸、フィリピンなどに従軍し写真を撮り続けた。私がこの人と知り合いとなったのは、義烈空挺隊の慰霊祭に出席してくれた時からである昭和五十一年義烈空挺隊についての一書を執筆するとき、私は当時鎌倉に住んでいた小柳さんを訪ね、沢山の写真をもらった。貴重な写真ばかりなので版権のことを尋ねたら、貴方からお金をもらおうなどとは毛頭も思っていないと言われた。

この人はその後我々の戦友の某君の勧めで宮崎県川南町に転居し、間もなく奥さんを失い、もともと子供が無いので一人暮らしになってしまった。毎年川南護国神社の例祭には参列され、いつも旧交をあたためていたが、平成六年に亡くなった。

だいぶ前置きが長くなったが、この度延岡で「従軍カメラマン小柳次一の写真展」が開催されたとて、私の知人が新聞記事数枚を送ってくれたので、嘗て肝胆相照らした小柳さんを思い出して特攻隊に関するものを紹介する。

義烈空挺隊に関するもので新聞に出ているのは次の五点であるが、私の持っている写真もこの際紹介する。

下の説明文は私の書いたもので、展示会のものは意を尽くしていない。

宮越春雄准尉の出撃前の乾杯。

菅原軍司令官に出撃申告をしているところ、この場面はニュース映画に保存されていて奥山隊長の肉声を聞くことができる。

重爆に乗込んだところ、手前は新藤勝曹長

搭乗前各人郷里に向かい別れを告げる。

搭乗機に向かう。晴れやかな表情。

出撃は夕刻だったが、その前に宿舎で何か書き残している一隊員。

搭乗機に向かう隊員を撮っていた小柳カメラマンが振り向くと、奥山隊長と諏訪部飛行隊長が握手していた。慌てて撮ろうとしたら終ってしまった。そこで済みませんがもう一度お願いしますと言ったところ、奥山は千両役者は忙しいナーと言ったので、皆ドッと笑った。

重爆の天蓋を明けて別れを告げる奥山、諏訪部の最後の姿

もう金はいらぬ国防献金をしようと、有り金全部出した。

軽量で高カロリーの食糧をもらったが、こんなに沢山食うほど生きていない、と言って世話になった基地勤務に与えた。

特攻隊員の父の手記

次に注目をひいたのは、第五十五振武隊黒木国雄少尉（出撃時、陸士57期）の出撃を見送った父の手記である。黒木大尉は延岡出身なので特に参観者に感銘を与えた。と言っても私が見たわけではない、すべて新聞記事に依る。黒木少尉を長とする同隊の三機は、20年5月11日知覧を出撃し嘉手納沖で散華している。機種は3式戦。以下手記

出撃前夜三角兵舎で

国雄　二十一年間の話あれど　明日早朝の出撃　身体無理あってはと　国チャン　もう寝ようと　寝入りにつきしか

「母チャンはあの手紙（遺髪）みて泣きはせぬかったね」　と云ったり

「何が　母チャンが泣くもんね　覚悟出来ている　既に陸士に採用のあの電文より　任官後　益々其の決心は出来てるよ　安心しなさい」

祖母上様の魂魄と　母のあの強い心と共に　見事敵艦に突撃突入必沈してくれよと激励の話をす

国雄　安心せしか寝入に着きし如し

これでこそ安心なり

自分は寝られぬままに　国雄の寝顔秘々と眺め三時半の起床まで感ずる事次々なり

我子ばかりで無し　特攻隊の方々　明

日は出撃だ　夜中冷気覚ゆる事なれば
風邪等にかかられてはと毛布を着せ乍
ら室内を廻りたり　廻り乍ら然々とみ
るに　どの人もどの方も明日午前六時
出撃　敵艦に突入する死を決したる方々
と思はれず　無心に寝着きされし如く
なるも　真の夢路は　故郷の父に母に
通ひおる事ならん

出撃のとき

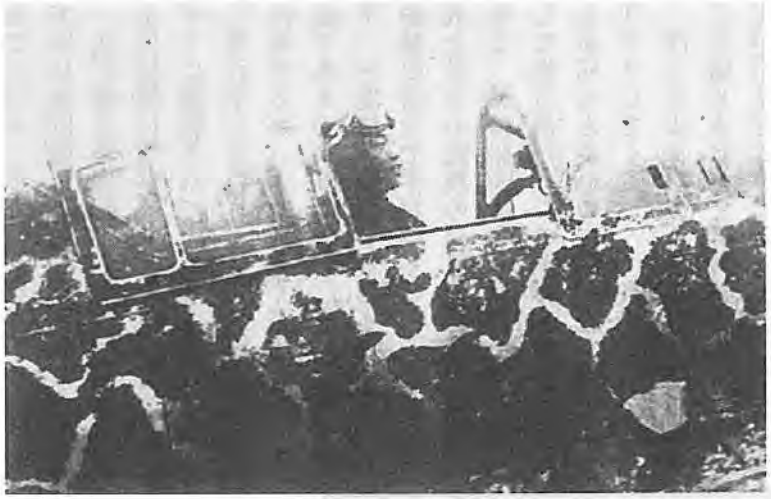
時間も近々　上空に　爆音高し　上空
援護機の警戒厳重となり　始動開始の
白旗に特攻機一斉に　爆音高し
国雄　私のそばに来り莞爾として
「父チャン　国雄の晴れ姿見て嬉しい
じゃろ」と
「オ、嬉しい　喜ばしい　母チャン皆
にも　いい土産が出来た　シッカリ頼
むヨ」
「征きます」
これが最後の言葉　この時が最後の敬
礼となりぬ
黒木隊全機の発進終わり　大いに安心
したり
上空如何にと見るに　国雄機遥か遠く
一粒の点
離れ居るに　若しや故障で無きかと心
配するも　つかの間
隊員の離陸を見届けしか　上空半週中
の編隊の最先頭に大きく猛烈なる速度
にて着く
司令官閣下の上空にて最後の翼振り
南方さして飛び去ったり
横手少尉　ウマイ　流石黒木なり　あ
の編隊の組様第一番　東京帰隊隊長の
報告に土産出来たりと聞き　自分も亦
嬉し
上空遠々点々と見ゆ特攻機に　亦　伏
し拝み　戦場まで無事着　全機突入の
出来ます様　神々に祈願合掌したり
あ、涙無し　無言　万歳あるのみなり
横手少尉と　戦闘指揮所の無電室に至
り　刻々発信の記号を聞く　午前八時
四十二分　第一突撃隊突撃開始　我突
入の無電を聞く　これ最後也
昭和二十年五月十一日午前八時四十二
分也

黒木国雄少尉の遺書

57期生発行の書物の拠る

父上様　母上様　国雄は全く日本一の
多幸者でした　二十二年のお教えどお
り　あすお役に立つことが出来ます
私が幼少のころからあこがれていた皇
国軍人となることができ　しかも死所
を与えていただけたのは　ただ感激の
ほかございません　隊長として　部下
とともに必死必沈　大君のみ楯と散る
覚悟です　また散り得るものと信じて
おります
神州に仇船よこすえみしらの
生き胆とりで玉と砕けん
二十二年すぎしこしかたをかえりみま
すと　ただただ　皆様に対して　感謝
の念で一杯です　実際たのしいもので
した　陸軍士官学校予科本科と　あり
がたき四年は　わが一家にも日本の家
庭として　感謝と誇りに満ちた日であっ
たと思います（途中略）前夜　国雄拝

小柳カメラマン撮る



昭和20年5月11日午前6時知覧出撃直前の黒木少尉

走り始めた我が子の機に盛んに手を撮る父親

飛行第十五戦隊の中隊長として百式司偵を駆けり比島作戦時活躍した倉地治氏（士54期・平成13年物故）の戦記を、ある人から提供された。その中の一篇をここに掲げる。「偵察将校の話」と題しているが、自分の名は出したくないと但し書きがついているので、操縦者たる本人の手記である。

偵察将校の話

倉地　治

特攻隊への協力は特別神経を使います。敵戦闘機の圧倒的な制空下で、爆弾を抱えた速度の遅い特攻機を、何としても目標まで誘導せねばなりません。この時は隼三機を誘導しました。早朝ネグロス島の基地を何とか無事離陸し、後方の三機と上空の敵戦闘機の見張りを、伝声管を通じ機長に常に報告します。「上空敵機なし」「特攻機異状なし」又は「特攻機遅れ速度落せ」など。特攻機とは前日の打合せ通り単縦陣で距離を取りますが、勿論目視範囲内です。その間羅針盤と時計と航空図を見て地点を標定し、後方上空と一刻の油断も出来ません。目標は連日偵察しているレイテ島に対する補給船団と、これを護衛する軽空母を基幹とする敵機動部隊であり、目標近くになりますと極度に緊張いたします。敵の戦闘機の常用高度は、今までの経験上四〇〇〇米以下であり、この時は五〇〇〇米で航進しました。

天候は下層雲は積雲で一〇〇〇～一五〇〇米にありましたが、至るところに切れ目があり上空は快晴で、快適な飛行日和りでした。左前方に激戦中のレイテ島が見えており、もうそろそろ目標が視界に入ると思う頃になりますと、機長は速度を落としなるべく特攻機を近付け、相互の連絡を容易にするように少しの蛇行飛行を行いました。序でに申しますと、好目標の多いレイテ湾を攻撃しなかったのは、この頃になりますと敵の防空が完璧になり、レイテ湾上空には常に戦闘機二十数機が二重三重に制空しており、二～三隻の軽空母かあり、これを護衛する小型艦艇が多数の機関砲を装備し、雨霰の如く対空砲火を浴びせ特攻機の突進を阻止しますので、湾外の目標を選定しました。

我が編隊はミンダナオ島上空に出て南進し、幸い敵戦闘機に遭遇せず、断雲の洋上より漸く敵輸送船団を発見、機長は速度を落とし特攻機に近付き旋回し翼を振り、打合せ通り「突撃！成功を祈る」の合図を送る。特攻機は全速で近付き「承知」と翼を振り、反対方向に旋回降下し一瞬視界より去った。

我が機は戦果確認の為増速し高度を上げ目標に接近した。もう既に敵のレーダーに捕捉されている筈であり、大きく蛇行飛行を行う。私は眼鏡で下方を注意するが、下層雲多く艦種識別不可能である。高度六〇〇〇米、外気温零下一五度位、酸素を吸はず手袋を通し眼鏡の冷さで手が震える。後上方の警戒と洋上の監視の交互で緊張の連続である。機は船団に余り近付かず依然として蛇行飛行、この間僅かな時間であるが何んと長いことか、息が詰まりジリジリしてくる。

洋上は少々白波があるが平穏であるこの時ピカピカと線香花火のような閃光が至るところより起こり、これは特攻機に対する船団の対空射撃ではないか、なおよく見ているとピカーと大きな閃光、続いて濛々たる黒煙、「ヤッタ！」と思はず大声をあげる。機長も気付いたらしく急降下で接近、私は写真機片手に眼鏡を覗いたところ、大きな火の玉が飛んでくる。機は外側に急旋回するとともに急上昇し、また急降下の繰返しで、座席に押しつけられるやら身が捩じられるやら、上か下か分からない。やっと機が安定したので洋上を見たが、黒煙が浮かんでいるが残念ながら結果が確認できず、ふと後を見ると高射砲の破裂煙が点々と浮かんでいる。なお洋上よりピカピカと対空射撃が見える。

機長より「これ以上接近は危険、離脱する」と連絡あり、横滑りで降下する。後を振返りつつ特攻隊の神様達、写真も撮らず申し訳ありません、但し壮烈な体当たりこの目で見ました。これで許して下さい。高射砲の猛烈な洗礼と回避する急激な旋回で、クタクタになり喉がカラカラになり、水筒の水を一口飲みやっと落着き「後方異状なし」と機長に報告する態でありましたが、漸く興奮から醒めたとしても、あの火柱、あの黒煙、一瞬の間に消えた英雄達、感動とか壮烈とか、言葉では言い表せません。

機は高度四〇〇〇米でミンダナオ島の中間を西進中である。「攻撃成功、火柱確認するも雲多く細部不明」と基地に打電する。本日の飛行は全く幸運で敵戦闘機に遭遇せず、無事ネグロス基地に着陸した。掩体に入れ遮蔽した直後、定期便のP38敵機二機が制空飛行、ゴウゴウと重い爆音を残して通過した。あと一分遅れたら危険だった。

司令部で機長と共に航空図で詳細報告し、帰ってから報告書の作成にかかったが、あの壮絶な体当たり、あの感

動を如何に表現するか、木陰のピストで色々考えたが頭が痺れてよい考えが浮かばぬ。何とか纏め、宿舎に戻り戦友達とタビオカをかしりながら、色々と尋ねられ話合つたが、何を話しても話足りないし言葉では言い表せない。ローソクの下で遅くまで興奮が醒めず酸素不足の長距離飛行で頭も痛く、悶々たる一夜を明かしました。

この記事日付がないので三機の特攻隊員の氏名が判らないのが残念。

百式司偵

「梯梧之塔」について

特幹一期生　深井　正昭

読谷村に喜名という集落があります。喜名小学校の北方約三〇〇米、国道58号線沿いの小高い丘の上に、喜名区民皆様の奉仕と善意によって立派に建立された「梯梧之塔」があります。戦後間もない昭和二十三年、当時の喜名区の区長さんが、喜名部落の東方山地に散乱している沖縄戦戦没勇士の遺骨を見るに忍びず、区役員、青年会全員の協力を得て遺骨を蒐集し、近くの洞窟に安置し慰霊碑を建立されました。そして碑建立の祈念として、南国情緒豊かな梯梧の木を植えましたので、梯梧之塔と命名されました。その後建立地はアメリカ軍により立入り禁止区域となり、清掃、参拝も出来なくなってしまったため、昭和三十一年七月、喜名区の区長さんの肝いりで広く浄財を募り、土地提供者の協力を頂いて現在地に移転できました。しかし戦後の資材の乏しい時代の造成で痛みが激しく損壊の恐れも考えられたため、平成四年五月に新規に再建したものであると沿革に刻字されています。

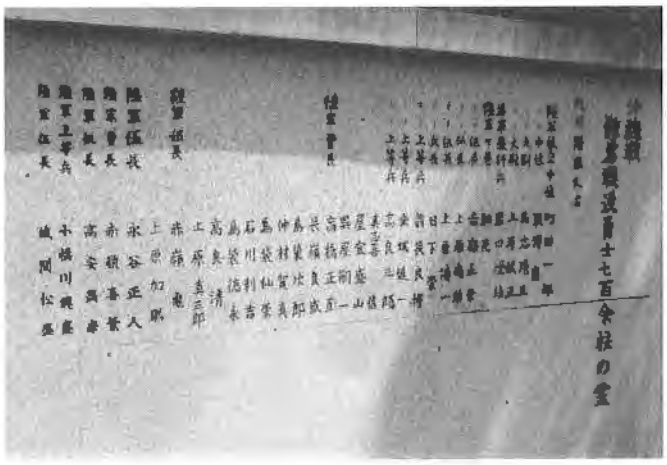
碑正面の黒御影石には『さきほこるはなびらちらし　でいごじゅに　くれないそめて　なつはきにけり』の短歌が刻まれています。

碑の背面には梯梧の塔を守護するように長方形の壁面が立ち、「梯梧之塔沿革」とともに「沖縄戦　無名戦没勇士七百余柱の霊」の刻銘があって、その左側に『判明階級氏名』として三十二名のご英霊の階級氏名が刻まれています。

そして、その第一番目に『陸軍航空中佐　町田　一郎』と刻銘され、二番目に『陸軍中佐　黒澤　巌』と刻まれています。黒澤中佐は北飛行場の警備等に当たった第五六飛行場大隊の大隊長さんで、以下判明の方々も飛大関係の戦没勇士と思われました。

町田一郎中佐は、第三独立飛行隊に所属した航士56期の操縦、浜松からサイパン強襲に四度も赴き感状にも輝いた重爆の名パイロットで、義烈空挺隊員空輸の出撃時は陸軍中尉でした。大勢の義烈空挺隊関係戦没勇士の中で、何故、町田一郎中佐のみが、氏名が判明したのであるのか、大きな疑問もありますが、真相は分かりません。

町田中佐は群馬県桐生市出身、自宅近くの菩提寺、祥雲寺境内の町田家墓地に『征空院忠薫毅烈一酬居士』として安らかに眠られております。



大東亜戦争後（降伏後）の 神風特攻を偲んで

江藤　高義

かつて海軍航空隊特攻主力の予科練生が猛訓練を重ねた大分海軍航空基地は、六十余年の歳月を経た現在、見事に整備された大洲総合運動公園や新大分球場等に生まれ変わり大分市民の憩いの場所となっている。

昭和二十年八月十五日、この大分基地から大東亜戦争最後の特攻機彗星艦爆十一機が、沖縄の米艦艇を目指し出撃した。滑走路の果ては別府湾で、薄紫色の国東半島が見えたはずだ。今は目の前にあるのは、国東半島の大分空港に乗客を運ぶホーバ基地や白いコンクリートの建物が立ち並び、往時を偲びあやかる物は何一つ残っていない。

この大洲運動公園北端、ホーバ基地に近い処にあるテニスコートA・Bコートの間の空間に『神風特別攻撃隊発進之地』と刻まれた白の御影石で、人が立てば胸の高さ一・五米ばかりの横長規模の簡素な石碑が建っている。石碑の前面の歩道を人が歩いていても、立ち寄って見入る人影は殆ど見かけない。

この石碑は昭和五十一年に建立され、発起人は旧軍人有志ではない。旧制大分中学（現上野が丘高校）五十八期生の有志である。大中五十八期生は三学年に進学すると学徒動員令で、勤労学徒として大分海軍航空基地に付設された第十二海軍工廠で航空機機体生産作業に従事中の昭和二十年四月十八日、B―29爆撃機の投下した爆弾で大中学徒も十七名の犠牲者を出している。

又、学徒は日頃特攻隊員に接し、出撃を見送っている。石碑の裏面にはこう刻んである。

『昭和二十年八月十五日、午後四時三十分太平洋戦争最後の特別攻撃隊は、この地より出撃せり。云々』とあって、宇垣提督を冒頭に十八名の氏名・年令・出身県が列記され刻まれている。此のような石碑では珍しく階位は省かれている。実際は二十三名出撃しているが途中、飛行機の故障で不時着して生存した五名の名は刻まれていない。

冒頭の宇垣纏は、日米開戦時連合艦隊参謀長でハワイ奇襲作戦に係わり、昭和十八年四月十八日、山本長官がラバウル基地から、一式陸攻で第一線基地将兵の慰問激励に向かった際に、ブーゲンビル島のブイン上空で、米P―38戦闘機三十六機の待ち伏せに遭って、機上戦死した折り、参謀長宇垣中将の搭乗していた二番機も撃墜されて海上に不時着し、中将は重傷を負った。昭和十九年十月十九日から二十六日に亘ったレイテ沖海戦では、栗田艦隊の第一戦隊司令長官として戦艦「大和」に将官旗を翻した。

昭和二十年二月十日、残存の海軍航空隊の精鋭を集めて編成された第五航空艦隊司令長官に就任し、鹿屋基地に司令部を置き、四月一日米軍が沖縄に上陸してから、菊水特攻作戦の指揮を取り、八月二日に司令部を大分基地に後退させ後図を計った。八月十五日、終戦の詔勅があった後の午後四時三十分、彗星十一機を率いて、最後の沖縄特攻に飛び立った。それが降伏後であった事、司令長官自らが先頭に立つという特異さによって終戦秘話となっている。宇垣長官の日誌「戦藻録」の最後に『幾多の殉忠の将士の跡を追い、特攻の精神に生んとするに考慮の余地なし』と記されている。

宇垣長官が同乗したこの最後の特攻指揮官は、大分県津久見市出身で海軍兵学校七十期の中津留達雄大尉である（戦死後少佐、降伏前に戦死した特攻隊員は二階級特進）中津留大尉は開戦の年の秋に兵学校を卒業し、開戦時少尉候補生として軽巡「北上」に乗艦、昭和十七年十一月の第三次ソロモン海戦時、撃沈された駆逐艦「曙」に乗艦していて、乗組員二四六名中、十二名

が救助され生存した一人で九死に一生を得た。昭和十八年一月に三十九期飛行学生として、霞ヶ浦海軍航空隊に入隊しパイロットの第一歩を踏んだ。第三十九期卒業後、宇佐航空隊の艦爆教程の実用訓練（急降下爆撃）を終えた後、教官として宇佐空に残った。昭和二十年二月、第五航空艦隊が編成された折り、五航艦の最精鋭第七〇一航空隊（彗星艦爆）の基地国分に赴任し、六月に美保航空基地に移動した。宇垣長官が大分基地に後退する一ヶ月前の七月初めに、彗星二十機を指揮して大分基地に移動した。終戦の前日八月十四日に長官から、彗星五機の特攻を命ぜられたが、十一機を揃え指揮し宇垣長官を乗せて、沖縄に向い出撃した。午後八時頃、沖縄の伊平屋島の上空に達しているが、泊地の戦勝気分に湧いている米艦艇を避けて突入している。この事について本年の『文芸春秋』十一月特別号の「特攻指揮官中津留大尉の決断」で述べられている。

神風特別攻撃隊の公式布告の第一号は、海兵七十期の関行男大尉（戦死後中佐）である。関大尉は昭和十九年十月二十五日、敷島隊を指揮して比島マバラカット基地を飛び立ち、レイテ沖で米空母セント・ローの甲板に体当たりし撃沈した。後輩に対し「散れ山桜、かくの如し」と遺している。この後輩に最後の特攻に加わった伊東中尉・北見中尉（共に海兵七十三期）がいる。

最初と最後の特攻指揮官が奇しくも、海兵七十期であり豊予海峡挟んで対面する愛媛県と大分県の出身である。又、共に第三十九期飛行学生であり卒業後、宇佐空で共に艦爆実用訓練を受けた後、中津留大尉は宇佐空の艦爆教官として残り、関大尉は飛行学生の教官として霞ヶ浦航空隊に帰った。宇佐空艦爆教官時代の二人は別府の流川通りにあった当時の海軍御用レストラン千疋屋の常連であった。

二人は家庭環境も酷似している。二人共一人子で、中津留大尉は宇佐空時代の十九年春に結婚し、二女を授かっている。次女は出撃二十日前に生まれ、中津留家を継いでいる。関大尉は出撃五ヶ月前に結婚し、母一人を愛媛に、最愛の新妻を鎌倉に残してレイテ沖で散った。

此のように神風特別攻撃隊には、家族持ちの二十三～四才の烈士が多数いた。

最後の特攻出撃者名簿（階級は出撃時）

操縦員

中津留達雄大尉（海兵70期・23才）
字垣纏長官（55才）同乗
伊藤幸彦中尉（海兵73期・20才）
山川代夫上飛曹（丙　飛・21才）
池田武徳中尉（学生13期・22才）
渡辺繰上飛曹（甲飛11期・22才）
後藤高男上飛曹（丙　飛・24才）
松永茂男二飛曹（特乙1期・20才）
藤崎孝良一飛曹（丙　飛・19才）
○前田又男一飛曹（丙　飛・19才）
○川野和一一飛曹（乙飛18期・20才）
○二村治和一飛曹（甲飛12期・21才）

偵察員

遠藤秋章飛曹長（乙飛9期・23才）
大木正夫上飛曹（乙飛17期・21才）
北見武雄中尉（海兵73期・20才）
山田勇夫上飛曹（甲飛11期・20才）
内海　進中尉（学生13期・21才）
磯村　堅少尉（生徒1期・22才）
中島英雄一飛曹（乙飛18期・19才）
吉田　利一飛曹（乙飛18期・20才）
○川野良介中尉（学生13期・21才）
日高　保一飛曹（乙飛18期・20才）
○栗原浩一二飛曹（甲飛13期・20才）

○印は不時着、生還者
（但し日高1飛曹、死亡「戦死」）

宇垣長官と彗星

「第72振武隊 荒木 幸雄 少尉を偲ぶ集い」について

深井　正昭

去る8月1日「子犬を抱いた少年飛行兵・荒木　幸雄をしのぶ集い」が出身地である群馬県桐生市のホテルで開催されました。

荒木伍長たち第72振武隊は、昭和20年5月26日1600発進の沖縄への薄暮攻撃の命令で、万世飛行場で待機中、新聞特派員によって、子犬を抱いて微笑む特攻隊員が撮影されました。この後、沖縄方面の天候悪化のため出撃中止となり、翌27日午前5時、鹿児島県万世飛行場から進発し、沖縄本島東方洋上で散華されました。

集いの当日は桐生市民を中心に県内各地からも参加し、更に荒木少尉と少飛同期の方、同教官の方、群馬少飛会の方々をはじめ、遠く加世田市の万世平和祈念館元館長上塘徳晃氏、元知覧特攻平和会館館長板津忠正氏等々も参加され、また、「ユキは十七歳特攻で死んだ」の著者毛利恒之氏も出席して、意義ある集いになりました。

会場には航空特攻映画制作委員会田形竹尾氏、苗村七郎氏、知覧・加世田・大刀洗各平和祈念館、世田谷山観音寺、靖国神社等々の協力を受けて制作された「特攻國破れても國は滅びず」のビデオについてもPRがされていました。

荒木伍長

荒木幸雄17年の軌跡

昭和3年3月
10日、桐生市宮前町のお菓子屋、荒木丑次(うしじ)、ツマさんの次男として生まれる。

昭和15年3月
12歳。桐生市西小学校卒業。

昭和18年3月
14歳。5日、海軍飛行予科練習生(予科練)試験に合格。入隊時の身体検査で不合格。

同年8月
15歳。陸軍少年飛行兵(15期乙)試験を受け、合格。15期乙は異例の短期速成をめざす。

同年10月
東京陸軍飛行学校を経て、大刀洗(たちあらい)陸軍飛行学校甘木生徒隊(福岡県)に入校。

昭和19年3月
16歳。21日、甘木生徒隊卒業式で、航空総監賞を受ける。少年飛行兵(陸軍上等兵)となり、目達原(めたばる)教育隊(佐賀県)へ進む。5月、初単独飛行。

同年7月
目達原教育隊卒業式で異例の再度の航空総監賞を授与される。
朝鮮・平壌の第13教育飛行隊に転属。実戦機、九九式襲撃機の訓練を受ける。

同年10月
兵長に進級。九九式襲撃機で海上の艦船爆撃訓練に入る。

昭和20年3月
17歳。第23錬成飛行隊(元第13教育飛行隊)で特攻隊3隊を編成することになり、特攻隊員が募られる。同期の少年飛行兵全員が特攻隊を志願した。
九九式襲撃機を特攻機に改造するために各務原(かかみはら)基地(岐阜県)へ。
30日、特攻隊員名を発表。荒木幸雄伍長は第72振武隊(12機・12名)に任命された。

同年4月
1日、米軍が沖縄本島に上陸。
5日、寸暇を得て、肉親と最後の別れをするために桐生へ帰省した。
11日、各務原を発ち、平壌に戻る。

21日、転属命令を受け、中国・南京へ向かう。
25日、済南で整備のため待機中、先発した5機が米軍機に襲われ、2機が撃墜された。
残る10機は平壌に戻るよう命令される。

同年5月

17日、沖縄への出撃にそなえ、目達原基地へ進出せよと命じられる。当日、目達原着。
東脊振村の西往寺に宿泊して、出撃待機する。
25日、命令を受け、最前線基地の万世（鹿児島県・吹上浜）へ進出した。
26日、16時発進せよとの命令下る。
山撃待機中の14時ごろ、子犬を抱いて微笑む少年飛行兵5人の姿が新聞特派員によって撮影された。沖縄悪天候のため、出撃延期。
27日午前5時、第72振武隊は万世基地から発進し、沖縄南部周辺の米軍艦船の特攻攻撃をめざす。7時40分ごろ、沖縄本島東方洋上の米海軍第5レーダー哨戒地点（北緯26度25分、東経128度30分）にいたレーダー駆逐艦2隻と支援艦艇群に遭遇、ただちに特攻攻撃を行なったとみられる。
特攻機の突入で駆逐艦ブレインが大破炎上、航行不能になった。荒木幸雄、戦死。
第72振武隊の9名は、27日付で連合艦隊司令長官から感状が送られ、その殊勲が全軍布告された。荒木幸雄伍長は4階級特進、少尉に任ぜられ、金鵄勲章（功4級）と勲6等単光旭日賞を授与された。

「海ゆかば」の歌の出所

万葉集にある大伴家持の長歌の中に含まれていて、作曲されたのは昭和十二年、信時潔作曲。

陸奥の国より金を出せるを賀ぐ詔書の歌一首

葦原の　瑞穂の国を　天降り　しらしめしける　天皇の　神の命の　御代重ぬ　天の日嗣と　しらし来る　君の御代御代　敷きませる　四方の国には　山河を　広み淳みと　奉る　御調宝は　数へ得ず　尽しもかねつ　然れども　わが大王の　諸人を　誘ひたまひ　善き事を　始めたまひて　金かも　たしけくあらむと　思ほして　下悩ますに　鶏が鳴く　東の国の　陸奥の　小田なる山に　金ありと　奉したまへれ　御心を　明めたまひ　天地の　神相納受ひ　皇御祖の　御霊助けて　遠き代になかりし事を　わが御世に　顕してあれば　食す国は　栄えむものと　神ながら　思ほしめして　もののふの　八十伴の雄を　まつろへの　むけのまにまに　老人も　女童児も　其が願ふ心足ひに　撫でたまひ　治めたまへば　ここをしも　あやに貴み　うれしけく　いよよ思ひて　大伴の　遠つ神祖の　その名をば　大来目主と　負ひ持ちて　仕へし官　海行かば　水漬く屍　山行かば　草生す屍　大皇の　辺にこそ死なめ　顧みは　為じと言立て　丈夫の　清きその名を　古よ　今のをつづに　流さへる　祖の子等ぞ　大伴と　佐伯の氏は　人の祖の　立つる言立　人の子は　祖の名絶たず　大君に　奉仕ふものと　言ひ継げる　ことの職ぞ　梓弓　手に取り持ちて　剣大刀　腰に取り佩き　朝守り　夕の守りよ　大王の　御門の守護　我をおきて　また人はあらじと　いや立て　思ひし増る　大皇の　御言の幸の　聞けば貴み

大伴家持が遠い先祖から朝廷に忠節を尽くした自分の家柄をのべている。

族に喩す歌一首

大伴家持

ひさかたの　天の戸開き　高千穂の岳に天降りし　皇祖の　神の御代より　梔弓　手握り持たし　真鹿児矢を　手挟み添へて　大久米の　丈夫武雄を　先に立て　靫取り負せ　山川を　磐根さくみて　履みとほり　国まぎしつつ　ちはやぶる　神をことむけ　まつろへぬ　人をも和し　掃き清め　仕へまつりて　秋津島　大和の国の　橿原の　畝傍の宮に　宮柱　太知り立てて　天の下　知らしめしける　皇祖の　天の日嗣と　つぎて来る　君の御代御代　隠さはぬ　赤き心を　皇方に　極め尽して　仕へ来る　祖の職と　言立てて　授けたまへる　子孫の　いや継ぎに　見る人の　語りつぎてて　聞く人の　鑒にせむを　惜しき　清きその名ぞ　おほろかに　心思ひて　虚言も　祖の名断つな　大伴の　氏と名に負へる　丈夫の伴

前の歌は大君に仕える家柄を述べたが、これは一族の者に諭した歌である。
梔弓＝ハジの木の弓。持たし＝持つの敬語。真鹿児矢＝鹿を射る強い弓。
磐根さくみて＝岩をふみわけて。隠さはぬ赤き心＝隠すことのない清らかな心。虚言も祖の名断つな＝かりそめにも祖先の名を断つな。丈夫の伴＝男子の者共よ。

特操の像遊就館に展示

田中市郎衛門

私共特操二期生会は亡き戦友の慰霊顕彰につとめて参りましたが、高齢化に伴い将来如何にこれを継承するかについて腐心しておりました処、一昨年靖国神社御創立百三十年記念事業の一環として遊就館を改築して展示面積を五割アップすることとなり、神社側から戦没者の遺影を一括奉納されれば同一箇所に展示して戴けるという吉報に恵まれました。私共は早速ご遺族、各会幹事の協力により全員に近い一三四柱（うち特攻七六柱）の遺影を集め、一期生会と共に神社に奉納することができました。長期に亘り奉展されることとなり、ご遺族・戦友にとっても喜ばしいことと存じます。

亦、この遺影展示コーナーの傍に以前からありました海軍関係の白鴎遺族会から奉納された「海軍飛11予備学生之像」がありますが、陸軍関係としても「特操戦士のブロンズ像」を設置して一対の学徒出陣顕彰像にして貰いたいという要望が強く、特操会（一期～四期）の総意として、京都護国神社の「特操之碑」を制作された吉原氏（特操一期）の協力によりこれを再現し、側面には「特操の戦史」と各期ごとの戦没者の氏名を刻した「銘牌」を配した立派な等身大の立像を各期代表により遊就館に奉納することができました。

八十翁となった我々ですが、折をみて遊就館に赴き六十年前の己が姿をこの像に重ねて見れば、想いは往時に還り若き血がたぎる思いがするのではないでしょうか、まだご覧になっておられぬ方は是非ご覧になられることをお勧め致します。

去る八月十五日の産経新聞コラム産経抄によれば一九八一年の「バビロン作戦」に参加したイスラエルのアモス・ヤドリン国防軍幹部学校長が人知れず来日され、そして真先に訪れたのは靖国神社だった。関係者が最近明らかにしてくれた話だが、ヤドリン氏が最も心動かされたのは特攻隊員のブロンズ像とゼロ戦だった。「国家の命で決死の任務を遂行した」（関係者）戦斗機乗り同士、ピリリと琴線に触れるものがあったのだろう。

特操勇士の像（靖国神社遊就館）

高野山にある空挺部隊の墓
墓前祭は元自衛隊空挺隊員が実施

昭和31年に建立したこの墓は、高野山聖域一の橋を入った一等地にあり、「空」の一字（弘法大師の親筆）を刻んだ簡素にして幽玄なものである。

初めは一万有余の戦死者だけを祀ったもので、挺進戦友会が管理し年々墓前祭を実施しており、昭和38年に建墓の第一人者中村秀雄氏（挺進第三聯隊の軍医）が逝去したので、この人の分骨を納めた。

その後紆余曲折を経て、空挺同志会が管理することになった。この会は昔の空挺隊員、自衛隊空挺隊員及びその退職者（元隊員と呼ぶ）の三者を以って構成しているが、墓の管理をするようになってから、会員の逝去者も遺族の申し出によって分骨を納めるようになった。

さて空挺同志会の役員は、始めは旧軍出身者がなっていたが、今は会長、理事長、事務局長等全部元隊員に入れ替わっている。そしてこれらの人が墓前祭を取り仕切っている。従ってこの行事が途絶える心配は全くない。

さる9月5日、台風の接近による激しい雨もこの時間だけは止み、現職自衛隊員も含め約三〇〇人が参加し、盛大厳粛に行われた。

本年分骨を納めたのは11柱

国旗掲揚は自衛隊員による

菩提寺不動院から一ノ橋まで恒例の街頭行進、音楽隊は信太山自衛隊

「空」の墓の前で

法灯絶えず　一千年
浮薄の流よそに見て
巨杉の守る「空」の墓
額突く顔やほり深し
世紀の華と謳はれし
あ、紅顔の　美青年
草蒸す屍かねてより
誓いし言の葉　蘇る
降下用意の合図にて
機上で交せし一言や
敵地見つめる横顔は
我が目底に焼付きぬ
朱に染りて横たわる
君が掌　あつくして
後は頼むとただ一言
別れしところ雲遥か
あ、挺進と　殉国は
胸の徽章と共にあり
ここに連なる若人に
受継がるべし万代に

墓域内にある副碑

中野学校出身の義烈空挺隊員

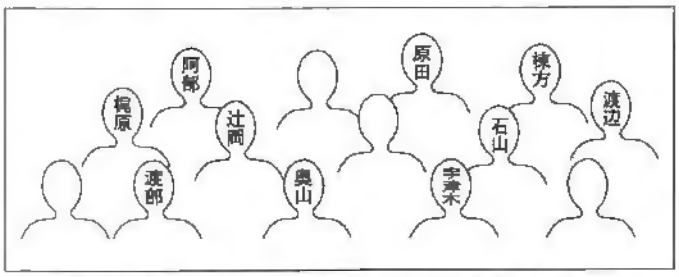
田中　賢一

潜入諜者（この項は主として不時着生き残りの熊倉順策氏談に依る）

昭和19年11月中野学校二俣分校を卒業するとき、サイパン行を志願する者はないかと言われ、真先に名乗り出たのが、梶原哲己、渡辺裕輔、原田宣章、棟方哲三、阿部忠秋、熊倉順策の6人だった。卒業する学生はそれぞれ各方面軍司令部付として発令されたが、この6人だけは大本営陸軍部付として発令された。

大本営付を命ぜられた6人の見習士官は早速上京、東京市ヶ谷台の大本営陸軍部の門をくぐった。そこには中野学校から同時に発令された辻岡創、石山俊雄の両少尉が待っていて、総勢8名となった。（これ以外に中野学校から通信の特技者として菅野敏蔵、酒井武行の2人の軍曹が加わるが、大本営には出頭していない）

一同は参謀総長梅津美治郎大将に申告した。通常、少尉や見習士官が着任しても参謀総長にまでは申告しない。如何に重大かがわかる。梅津参謀総長は、参謀次長秦彦三郎中将、第二部長有末精三少将をはじめ担当の参謀を引き具して、一同の前に進み出て、「オオ、お前達が行ってくれるのか、そうか、そうか」と、慈父のような眼差しで一同を視た。



奥山隊将校　名前の注記のないのは不時着生残り

申告が済んだ後一同は昼食を共にした。席上参謀総長は一人一人に家庭の状況を尋ね、優しく頷きながら、「九州から部隊が来るまで、郷里に帰ってきなさい」とて、祖先の墓にと菊花一輪づつを与え、傍らの参謀に「見習士官は特例をもって早く任官出来るよう、陸軍省に交渉せよ」と命じた。鶴の一声、翌日は全員少尉となった。これほど破格の優遇を受けた人々に大本営は何を期待していたのか。

敵に占領された南の島々には、中野学校出身の諜報員が配置されていた。残置諜報員と呼ばれ、サイパンにも残されていただろうが、連絡が絶えてしまった。この度義烈空挺隊の殴り込み作戦に同行してこれを潜入させようとしていたのである。中野学校で強調された「名もなく死ね」とはこのことであると悟った。

中野学校から来た人達が奥山隊に合流したときは、既に豊岡でB－29爆破の訓練が始まっていた。〈こんな逞しい兵隊が日本にいたのか〉10人は驚きの目を見張った。体つきが二俣分校で見慣れた軍人よりも一際大きく、如何にも鍛え上げたという感じがする。その代表が奥山隊長だった。「貴様ら何が出来るのだ」奥山の言葉は乱暴だが目つきは優しかった。「何も大したことは出来ません」辻岡少尉が、代表して答えると「そうか、忍術でも使えるかと思ったが、駄目か、ハッハッハ」と大声を出して笑う。傍らに控えていた渡部大尉がこれもまた大口を開けて笑う。まさに天真爛漫。

（10年も前のことだが、あるテレビ局が「カメラマンが見た衝撃の映像」というテレビ映画を撮る時、出演した熊倉君が、初めて奥山隊に接した時の印象を同じように語っている）

サイパンに強行着陸したら、中野組も先ずB－29爆破戦闘を行った後、独自の行動に移ることとし、連日の激しい訓練に入った。結局サイパン特攻は実現しなかったので、潜入諜者の行動計画は、残念ながら現存していない。

遺書遺詠

紆余曲折を経て、義烈空挺隊は20年5月24日沖縄に突入するのであるが、その頃は中野学校から来た人々も、純然たる戦闘員になっていた。特攻隊として、幾つかの遺書遺詠が残されており、その中で中野学校組の人の分を掲げてみる。

渡辺裕輔少尉の御両親様と宛名して書き残した中に「我々は必ず任務を達成します。私の墓は先祖代々の墓より大きくしないで下さい」と認めている。

阿部忠秋少尉の遺書は、藁半紙に鉛筆でなぐり書きしてある。

拝啓

御両親様

忠秋ハ本日敵飛行場ニ斬込ミマス

生前何一ツモ出来ズ申訳アリマセンリツ、高坊ニハ呉々モ宜シク御伝ヘ下サイ

祖父母様ニモ宜シク御伝ヘ下サイ

其レカラ私物・個軍刀一個送リマス承知下サイ

二十四歳デ玉砕シマス

任官以来オ世話ニナツタ方モ沢山アリマスガ略シマス

面白イ話モ沢山アリマスガ略シマス

附記

死後ノ処置ニツイテ

イ　金銭ノ貸借ナシ

ロ　婦人関係ナシ

リツチャン

必勝ヲ信ジ

後ニ続クモノヲ確信シ

今ヨリ征ク

何モ出来ズスマナカツタ

元気デ暮セ

高坊

軍刀ヲヤル

立派ナ日本人ニナレ

負ケルナ、父、母ヲタノム

神州不滅

辻岡　創

骨は砕け肉は散るとも魂魄は
すめらみくにを永久に守らん

梶原哲己

魁けて梅と此の身の散りゆかば
後に続かん桜花かな

渡辺裕輔

かずならぬみ山に咲きし若桜
君が御為に散るぞうれしき

原田宣章

すめらぎの皇祚護りて征く道は
永久の世迄も何朽つるべき

棟方哲二

君が代はちよよろづよといく春も
匂ひ忘るな若ざくら花

渡辺裕輔

絶忠

恋闕至情是赤心
尊皇大義是臣道
磅礴天地宇内間
唯有神州不滅気

棟方少尉は軍隊に入る前小学校で教鞭をとっていたが、出撃直前、一人の新聞記者を呼びとめて語った。「私の今生の願いは、もし叶うことなら、私の今の気持を教え子、いや全国の学童に一言伝えて征きたいのですが」ちょっと日を伏せて「それは叶はぬことですから、ここに書き留めておきましたから」とて手渡した紙片には、

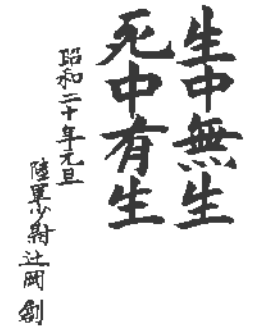
全国ノ学童ニ寄ス

義烈空挺隊　棟方少尉

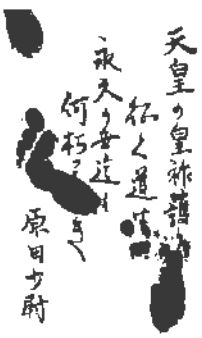
俺ガ行ク！

俺ガヤル！　俺ニ続ケ！

コノ意気デ進メ　コノ意気デ勝テ



ここに中野学校出身者で悠久の大義に殉じた9人の遺墨を掲げる。遺言が私の手元にない人も、幸いにして遺墨だけは全員かかげることが出来て、ホッとした。



特攻艦隊　戦艦大和の最後

米軍は四月一日朝、沖縄本島に上陸を開始し、午後二時には早くも中、北飛行場を手に入れた。

四日、豊田長官は「天」一号作戦部隊に対し、航空総攻撃の実施を下令した（電令作第六〇一号）。第一機動基地航空部隊に六航軍を協力せしめるとともに、一航艦と海上護衛総隊の航空兵力に策応を命じたものである。

鹿屋で航空総攻撃の決行が決定すると、日吉の聯合艦隊司令部では急遽「大和」以下の水上部隊を沖縄に突入させることが決定した。聯合艦隊首席参謀神重徳大佐が一人で立案して軍令部に持参し、富岡一部長の反対にあったが小沢次長の了解を求め、豊田長官の決裁をとってから鹿屋に出張中の草鹿参謀長の同意を求めるという強引な手段で発令された模様である。草鹿参謀長が第二艦隊司令部に説明に行ったときも、伊東長官は「無謀無策な作戦」であると納得しなかったが最後に「一億総特攻のさきがけになってもらいたい」という説明で即時に了承した。

四月五日午後、「第一遊撃部隊（「大和」、二水戦）は海上特攻として八日黎明沖縄に突入を目途として、急遽出撃準備を完成すべし」との命令（電令作第六〇三号）に続いて豊田長官は出撃を下令した。また豊田長官は「皇国の興廃は正に此の一挙にあり　茲に海上特攻隊を編成し壮烈無比の突入作戦を命じたるは　帝国海軍力を此の一戦に結集し　光輝ある帝国海軍海上部隊の伝統を発揚すると共に其の栄光を後昆に伝えんとするに外ならず……」と全軍に電報して、みずから全般作戦指導に任ずるため鹿屋に進出した。

海上特攻隊の編制は次のとおりであった。

「大和」

第二水雷戦隊（司令官古村啓蔵少将）

「矢矧」

第四一駆逐隊（「冬月」「涼月」）

第二一駆逐隊（「朝霜」「初霜」「霞」）

第十七駆逐隊（「磯風」「雪風」「浜風」）

各艦は五日出撃準備を行った。中央指示の燃料搭載量は片道分ということであったが、聯合艦隊参謀小林儀作大佐は呉に出向き、呉軍需部長島田藤治郎少将と相諮って帳簿外燃料をかき集めて、各艦に往復分の燃料を搭載させた。翌六日徳山港外に仮泊して、不要物件、機密書類を陸揚げし、艦務実習中の各科候補生を退艦させて、午後六時豊後水道を出撃した。

七日、第一機動基地航空部隊では、制空隊、爆戦隊、彗星隊および銀河隊計一〇〇機が午前九時三〇分過ぎ沖縄東方の機動部隊を攻撃した。海上特攻隊は正午前から三波に及ぶ敵艦上機（戦闘機一八〇機、爆撃機七五機、雷撃機一三一機、合計三八六機）の攻撃を受け、午後零時四七分「浜風」沈没、午後二時五分「矢矧」、二時三〇分「大和」が相ついで沈没した。「磯風」「涼月」「霞」も航行不能となり、午後四時三九分聯合艦隊長官は突入作戦中止を命じた（電令作第六一六号）。「霞」と機械故障のため後落していた「朝霜」はその後沈没、「磯風」は同夜自隊で処分された。

大和の最後

「大和」が悪天候を物ともせずに殺到してくる大編隊を視認したのはちょうど正午だった。二百機以上の敵機群に対し「大和」は主砲をはじめあらゆる大砲や機銃で応戦したが、爆撃と雷撃の組み合せの攻撃に対し、回避運動はほとんど不可能だった。零時四〇分には早くも爆弾二発が命中し、左舷にも魚雷一本が打ち込まれた。同時に駆逐艦「浜風」も魚雷を受けて艦首を突っ込み、たちまち海中に姿を消した。

軽巡「矢矧」は「大和」の身代わりになろうと先頭に立って行動中だったが、これまた魚雷一本と爆撃一発を受けて速力が落ちてしまった。

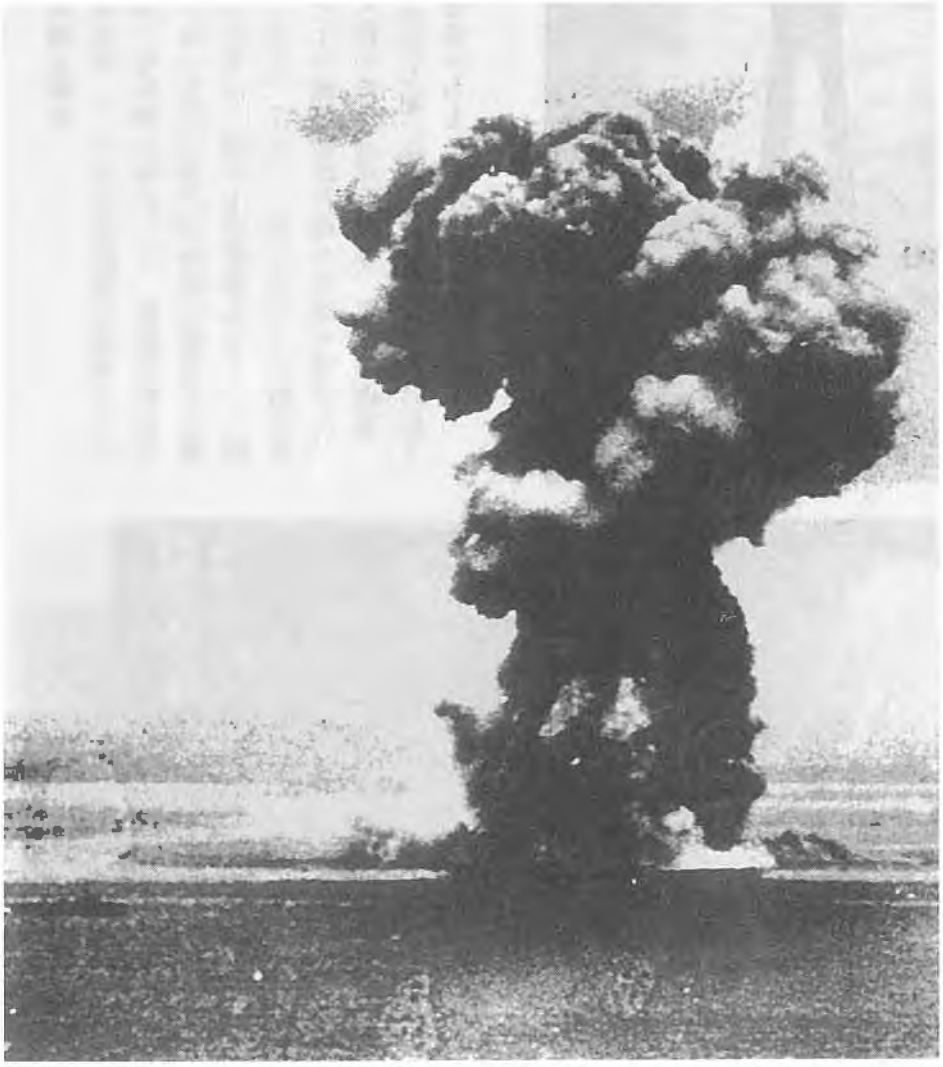
午後一時から約一時間以上にわたって、第一次の残りと第二次の攻撃隊約二百機が特に「大和」の左舷側に反復猛攻を加えた。一機の友軍機の救援もなく、孤立無援で圧倒的な空中攻撃隊と悪戦苦闘を続ける「大和」の姿は、悲壮そのものであった。第三波によって左舷には五本の魚雷が命中し速力もかなり落ちてしまった。

第四波では、命中魚雷二本が加わり、命中爆弾も十発以上となった。午後二時に最後の攻撃を受けた「大和」は舵はすでに動かず、傾斜も三〇度を超えた。もはやこれまでと、伊藤中将は幕僚一同に訣別して長官室に退いた。

午後二時すぎ、「大和」の甲板はほとんど垂直になり、檣頭の戦闘旗が海面にひたりそうになり、やがて大爆発を起こして午後二時二三分、波間にその巨体を没した。場所は坊の岬沖で、目的地までの約半分の行程の地点であった。

昭和16年 9 月20日、呉工廠で艤装中の「大和」。工事は完成に近づいている。

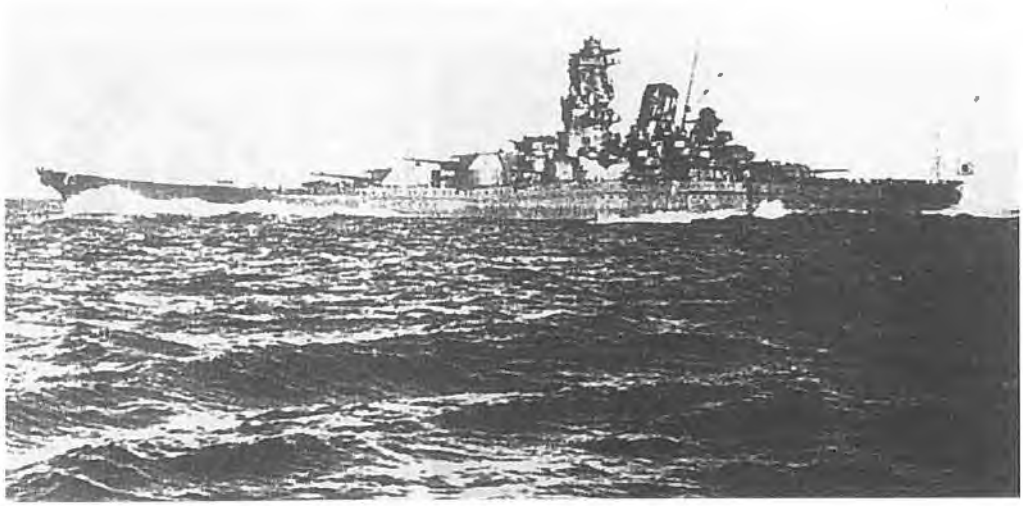
大和隊航跡経過図



2 回の大爆発を起こし中空2000米まで黒煙を吹きあげた後、坊の岬沖に沈んだ戦艦「大和」の最後。左の艦影は生き残った護衛駆逐艦。

伊藤整一中将

戦艦大和以下 特攻艦隊の碑



戦艦大和

戦艦大和以下の海上特攻

沖縄の地上軍の総攻撃（これは陣前出撃に変更されるが）及び航空の菊水一号作戦に呼応して、戦艦大和以下の特攻艦隊は4月6日一五二〇瀬戸内海徳山錨地を出撃した。大隅海峡を出た後は一機の上空援護もなく、一路沖縄に向かい驀進したが、7日一二四〇頃から枕崎西南西約二〇〇キロの洋上で敵艦載数百機の攻撃を受けた。

交戦約二時間、大和のほか巡洋艦矢矧、駆逐艦磯風、浜風、朝霜、霞が沈没し第二艦隊伊藤整一司令官以下三七二一名が艦と運命をともにした。

戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊慰霊塔
所在地　鹿児島県大島郡伊仙町犬田布岬（徳之島）
建　立　昭和43年4月7日
管理者　伊仙町役場

特攻艦隊留魂碑
所在地　山口県防府市江泊（江泊山中腹）
建　立　平成5年4月3日
管理者　留魂碑建立世話人会　代表　友広忠利

殉難鎮魂之碑
所在地　鹿児島県枕崎市火之神公園
建　立　平成5年4月
管理者　枕崎商工会議所内
平和祈念展望台事業奉賛会

浅間山の噴火のニュースを聞き思ったこと

田中　賢一

9月1日浅間山が噴火したとテレビは告げた。私は浅間山という地名を聞いただけで、次のこと連想した。それは終戦後浅間山に自爆した第一六八振武隊長の西川俊彦中尉のことである。私は西川中尉とは全く面識はない。知っているのはこの人の父の西川利助少佐である。西川さんは少尉候補者五期、勿論既に故人である。

西川少佐は昭和14年頃騎兵第四旅団機関銃隊長だった。この旅団は14年5月11日、襄東会戦で乗馬戦を行い大戦果を挙げている。世界の騎兵戦史で最後の乗馬戦であるが、私は戦史を書くため、戦後西川さんにそのときの模様を聞いたことがある。その折りに余談として息子俊彦中尉のことや、戦後浅間山腹に遺骨を収めに行ったことなど話されたので、この史実を知った。

西川中尉は八日市飛行場で終戦を迎えた。8月18日プロペラを外す直前三式戦に搭乗離陸し、郷里長野県岩村田小学校の校庭に遺書を投下し、浅間山に自爆し特攻戦没戦友の後を追った。

遺書に言う「私は、皇国の再起して、遂には世界の中心になりうる事を固く信じつつ、独断愛機と共に、我が浅間山頂に鎮まることに決しました。私は朝夕浅間山頂より皇国の、郷里の勃興を静かに見守って居ります。立ち上がる煙を見るごとに、思い起こして下さい。厳として、山頂に愛機と共に在ります。私の処置は褒むべきことではありませんが、皇軍将校、就中、特別攻撃隊長として、悪い処置ではないと信じます。只最後まで部下の面倒をみてやれなかったのが心残りです。父上母上には誠に申訳ないと存じます。何一つ孝行をして上げる事も出来ず、尚私一人、先に死ぬと言う事は不孝、此の上ないと存じて居ります。只、生命は既になかったものにしてあきらめて下さい。然し、私は決して死にはしない心算です。皇国勃興の暁までは厳として活きて居ります。これだけは信じて居て下さい」

57期生史より

小豆島「血書の壁」奉納さる

前号に東洋紡淵崎工場の寮舎に「盡忠」の血書の壁があって、靖国神社の遊就館に奉納することになった、というところまで掲載したが、九月の靖国神社の社報には次の通り載っている

七月十二日には血書の壁「盡忠」「臥薪嘗膽」二面が奉納展示された。

この壁は戦時中、陸軍船舶特別幹部候補生隊（陸軍海上挺進戦隊㋹要員）の兵舎として使用されていた香川県小豆島土庄町東洋紡績渕崎工場女子寮を解体工事した際に発見されたもの。八月十五日、この地で大詔を拝承した当時十七・八歳の海上挺進戦隊員達が敗戦の無念さと共に尚も変らぬ盡忠の真心を自身の血で認めたものである。

平成十二年の発見時より、土庄町三木佑二郎町長をはじめ関係者は、歴史的に価値のあるこの壁を永く保存したいとの願いから靖國神社に打診。本年二月上旬現地に於いて靖國神社神職によって搬出清祓式を斎行し、靖國神社に搬入。保存展示に向けての調査検討を重ねた上、陸軍船舶隊若潮会・船舶特別幹部候補生隊三期生会をはじめ多くの関係者の御協力を得て今回の展示となった。当日は遊就館大展示室内「血書の壁」前に於て三木土庄町長、中西全国若潮会会長、和田三期生会会長以下関係者の参列の下、奉納清祓式を行い、その後昇殿参拝を行った。

両日に亘る奉納式には、湯澤宮司より各代表に感謝状並に記念品が贈られ、深甚なる謝意が表された。

人生僅か　五十年
その半ばにも充たずとも
見はてぬ夢に悔ゆるなし
余すいのちはたらちねに
献上すると　遺書の文字
世界戦史に　たぐいなき
万古にかおる　大和魂
回天　㋹　震洋と
匕首もて心胆刺すがごと
鬼神たじろぐ　必殺行

今期の戦史 ⑤

ガ島の攻防

この作戦は17年8月初旬から翌年の初めにまで及ぶが、その間には戦争末期の特攻隊に劣らぬ精神の発露を見る史実があるので、本号と次号に期日を追って掲載する。今回は服部卓四郎著「大東亜戦争全史」の該当部分を転載した。

ガダルカナル島に対する米軍の反攻開始

ガダルカナル島　陸軍全然知らず

ポートモレスビーに対する南海支隊主力の作戦が漸く開始されんとしつゝあった時、ソロモン群島中のガダルカナル島及びツラギに対して米軍の反攻が開始された。これら両島はラバウルの東南方約五五〇浬の距離にあった。

元来ツラギはソロモン群島の首府の所在地として交通の要衝をなしていた。ガダルカナル島は単に土人の住む南海の一島に過ぎなかったが海軍はこの島に飛行場適地を発見し、七月以来設営隊を送って飛行場を建設中であった。同飛行場は八月五日概成し海軍航空部隊の使用も可能となった。

八月初頭、ガダルカナル島には海軍の警備兵力約二四〇名、設営隊約二七〇〇名、ツラギ及びガブツには航空隊兵力約四〇〇、警備兵力約二〇〇のほか設営隊約一四〇名が配置されていた。しかし不思議なことながら、大本営陸軍部は敵が上陸するまで、海軍がガダルカナルに飛行場を建設し、又一部兵力をこの方面に派遣していたことについて海軍側より何等の通報も受けず、従って全く知らなかった。

米軍の上陸開始

八月七日午前五時三十分、飛電はラバウルの第八艦隊司令部にガダルカナル及びツラギが空海よりする猛烈な砲爆撃下にあることを報じた。次いでツラギより「敵の多数船団は有力なる航空部隊及護衛艦隊協力の下にガダルカナル島及ツラギに奇襲上陸し現地警備隊及設営隊は苦戦中にして六時頃にはツラギ守備隊は最後の決意を為せる」旨の報告がもたらされた。

ガダルカナルにおいても敵は正午頃より上陸を開始した。敵の上陸作戦兵力は戦艦一、空母二、巡洋艦三、駆逐艦一五、輸送船三〇乃至四〇と報ぜられた。

第八艦隊の反撃（第一次ソロモン海戦）

三川第八艦隊司令長官は敵上陸の報に接するや、当時使用し得る軽艦艇全力を以て基地航空部隊の攻撃に策応して上陸中の敵を撃滅するに決し、甲巡五隻、軽巡二隻、駆逐艦一隻計八隻を以て七日午後二時三十分ラバウル出撃、八月午後ソロモン中央水路を経てガダルカナル島に驀進した。

この艦隊は同日夜、敵駆逐艦哨戒線の間隙を突破して巧みに敵主力部隊に迫り午後十一時三十分より奇襲的夜戦を開始した。激闘五十三分、洋上には残存する敵影も無く戦果は巡洋艦八隻、駆逐艦六隻撃沈と報ぜられた。然し艦隊司令長官は天明後の敵の航空攻撃を考慮し、泊地に蝟集していた敵輸送船団に対する攻撃を行うことなく帰途に就いた。かくして我が反撃作戦の最初の好機は失われた。

註　米海軍正式報告による損害は沈没、巡洋艦四隻、損傷、巡洋艦一、駆逐艦一である。

第八艦隊司令長官は又一方において、在ラバウル陸戦隊の約五〇〇名を以て増援隊を編成し、輸送船三隻によりガダルカナル島に急派するの処置を講ずると共に、第七潜水戦隊をしてガダルカナルの泊地に進入して敵船団を襲撃せしめた。しかしガダルカナル島増援部隊の派遣は、時間の経過と共に敵上陸兵力が意外に強大であることが判明したので、八日の正午に至って中止の已むなきに至った。

第十一航空艦隊と聯合艦隊

ラバウル附近にあった海軍航空部隊は、敵上陸の報に接するや直ちに出動して、長駆五五〇浬（筆者註、概ね東京より北海道北端まで）を南下して敵艦船に殺到した。攻撃は八日も継続され、戦果撃沈、大巡二隻、駆逐艦二隻、撃破中巡三隻、輸送船一隻と報ぜられた。

註　米海軍正式報告による損害は沈没、駆逐艦一隻、輸送船一隻、損傷駆逐艦一隻である。

第十一航空艦隊司令長官は八月七日、テニアンよりラバウルに進出してこの方面の作戦の直接指揮に当った。

一方瀬戸内海にあった聯合艦隊司令長官山本大将は事態を重視し、聯合艦隊海上決戦兵力の大部をソロモン方面に集中して敵を撃滅せんことを企図し、七日午後艦隊の出撃準備を下令した。又ソロモン方面の作戦が基地航空部隊の活躍に俟つところ大なるに鑑み第十一航空艦隊司令長官をして南東方面にある全海軍部隊の作戦指揮を統一担任せしめる如く処置した。

次いで聯合艦隊主力は、陸軍部隊によるガダルカナル島奪回作戦を支援するため、ガダルカナル島北方海域に集中することとなり、近藤中将指揮下の第二艦隊（前進部隊）は十一日、南雲中将指揮下の第三艦隊（機動部隊）は十六日、旗艦大和は十七日、それぞれ相次いで内海西部を出撃して南下した。第三艦隊はミッドウェイ敗戦後、従来の機動部隊の代りに七月十四日附編成された部隊であった。聯合艦隊司令長官は又当時印度洋方面に作戦中の第七戦隊及び第三水雷戦隊をして第二艦隊に合同せしめるよう処置するところがあった。

第十七軍の任務外増援処置

当時第十七軍の任務はモレスビーの攻略に集約されており、同軍はソロモン方面に対しては何等の作戦任務も有していなかった。しかし第十七軍司令官はガダルカナルに対する敵上陸の報を知るや海軍増援の急務たるを認めた。しかしながら、ニューギニヤに使用予定の南海支隊以外には当時直ちに使用出来る兵力がなかったので、パラオにあった歩兵第三十五旅団を急遽ラバウルに召致する如く処置した。

かくして、全く予期しなかった敵のガダルカナル島上陸により、南海支隊のニューギニヤ上陸は延期され、一度はニューギニヤに集中されていたところの現地陸海軍部隊の日は逐次ソロモン方面にも向けざるを得ない状況となりつゝあった。敵の南太平洋部隊司令官ゴルムレー中将が早くより企図し、又七月二十日我が横山先遣隊のバサブア上陸によって増大されたニューギニヤの緊急事態に対する対応処置として敢行したところのツラギ、ガダルカナル上陸は、徐々にその効果を日本軍の動きの上に及ぼし来ったのである。今や南東太平洋における彼我遭遇戦的作戦の主動権は連合軍の掌中に移りつゝあった。

大本営の情勢判断と処置

大本営の情勢判断――寝耳に水

ガダルカナル島に対する米軍の上陸は大本営にとって、全く寝耳に水であった。殊に陸軍部の多くの者はガダルカナルの位置すらその脳裡になかったし、又その位置を知っている者でも此の島に海軍部隊が配置されていたことは敵の上陸と共に初めて知らされたような状況であった。

それはそれとして、米軍の反攻が早くも昭和十七年八月に開始されるというようなことは大本営幕僚の多くの者の判断の外であった。

米軍の反攻は昭和十八年中期以降であるとの先入感が当時依然支配的であったのである。又開戦劈頭の真珠湾の大戦果は多くの人々の念頭から払拭されていなかった。殊にミッドウェイ敗戦の真相に関し多くを知り得なかった陸軍部において比の空気が濃厚であった。

かゝるところへ南東方面の第十七軍及び第八艦隊より米軍のガダルカナル及びツラギ上陸の第一報が齎らされた。報告の内容はいずれも漠然としており、第一線よりの報告を転電した程度のものに過ぎなかったが、八月七日敵上陸直後の大本営の情勢判断は大要次の通りであった。

一、敵の近来の豪語及反攻気配（八月に入るやツラギ方面に対する来襲機数は急激に増加した）等より判断して敵の積極的反攻が近く南東方面に開始されるかも知れないとの判断も一部にはあったが、敵の戦備及空母勢力より見て今次の反攻は偵察上陸の範囲を出でないと思はれる

二、若し敵の上陸が本格的なものであっても米軍全般の反攻態勢が未だ整備されてゐない状況より判断して、我陸海軍部隊を以てする両島の奪回はさして難事でない

然しガダルカナルの飛行場が敵に使用されるならば日本軍爾後の作戦は甚大な影響を受けることになるので奪回作戦は即決を旨として急速に行ふ必要がある

大本営の判断は以上の通りであったが、当時日光の御用邸に御滞在中であった天皇はこの戦況を聞かれて事態を著しく重大視せられ即時東京御帰還を仰せ出された。側近及び関係者は大いに狼狽してこれを永野軍令部総長に伝えたので、同総長は恐懼して直ちに日光に伺候し統帥部の見解を奏上した結果、漸く御帰還を思い止まって頂いた事実があった。

大本営の処置

大本営陸軍部は右判断に基きミッドウェイ作戦後大宮島（グワム）にあった一木支隊をトラックに至らしめて第十七軍の隷下に入れるよう八月十日処置し、且つ第十七軍司令官のダバオ出発と共に在比島第十四軍に隷属換を発令していたところの青葉支隊（第二師団歩兵第四聯隊基幹）を第十七軍に復帰せしめた。

又大本営陸軍部は八月十三日「情勢に応ずる東部ニューギニヤ、ソロモン群島方面作戦に関する陸海軍中央協定」を策定し、聯合艦隊司令長官及び第十七軍司令官に指示した。その要旨は次

の通りであった。

一、作戦方針

ポートモレスビー攻略作戦を既定計画に基き速かに遂行すると共にソロモン海戦の戦果を利用し陸海軍協同して速かにソロモン群島の要地を奪回す

二、使用兵力

陸軍　第十七軍（南海支隊、歩兵第四十一聯隊、一本支隊、歩兵第三十五旅団、青葉支隊等歩兵約十三大隊基幹）

海軍　第八艦隊及第十一航空艦隊の大部を基幹とする南東方面部隊

第二艦隊及第三艦隊の大部を基幹とする聯合艦隊主力部隊

三、作戦要領

㈠ポートモレスビー攻略作戦は既定計画に基き速かに之を遂行す

㈡速かに出発し得る第十七軍の一部をして海軍と協同しガダルカナル島所在の敵を撃滅して同島の要地特に飛行場を奪回す

又努めて速かにツラギを攻略奪回す

㈢前諸項の作戦間又は其の要地攻略後東部ニューギニヤの戡定作戦（ラビ、サマライの攻略作戦）を行ふ

右の作戦要領は東部ニューギニヤの作戦とソロモン方面の奪回作戦を併行的に実施せんとするものであった。

敵のマキン島奇襲上陸

ガダルカナル方面の敵は依然その行動活発で逐次兵力を増強しつゝあった。丁度その頃、あたかもガダルカナル作戦に策応するかの如く、敵は八月十七日潜水艦二隻を以てギルバート諸島中のマキン島に奇襲上陸を行った。

聯合艦隊司令長官は第四艦隊司令長官に対し、マキン島の奪回及びナウル、オーシャン両島の破壊占領を下令して中部太平洋方面の情勢に対処せしめた。

敵のマキン島上陸部隊は同島の我が施設を破壊した後撤退したので、第四艦隊は間もなくこれを奪回して、その防備を固めたが、ガダルカナル方面の戦局は依然混沌としていた。

一木支隊の攻撃と第二次ソロモン海戦

一木支隊先遣隊の攻撃

第十七軍司令官は大本営の指示に基き海軍と協同して敵のガダルカナル占拠未完に乗じ、速かにこれを奪回するに決し、その任務を先ずトラックにあった一木支隊に附与し、且つ現地海軍と協定の結果、その先遣隊（支隊長の指揮する同支隊主力、即ち歩兵一大隊及び工兵一中隊）をして駆逐艦によってタイボ岬に上陸せしめる如く部署した。

一木支隊先遣隊は駆逐艦六隻によりトラックを出航してガダルカナルに向った。この間、ガダルカナルに上陸した敵はその兵力約二千で戦意旺盛ならず、ツラギに向い逐次後退中である。又米軍のガダルカナル島の上陸の目的は単に飛行場の破壊にあるとの駐ソ日本大使館附陸軍武官の報告の通報を受け、先遣隊は勇躍して八月十八日夜半タイボ岬に上陸し、後続隊の上陸を待つことなく直ちに西進して、飛行場附近の敵に対する攻撃準備にとりかかった。海軍もまた当時トラックにあった横須賀第五特別陸戦隊の一部を、十七日夜ガダルカナルに急送した。同部隊はタサファロングに上陸し、所在海軍部隊との連絡に成功した。

一木支隊先遣隊は二十日夜よりガダルカナル飛行場東側のテナル河畔において米軍に攻撃を加えたが容易に成功しなかった。二十一日午後に至るや却って敵の強力な反撃に遭い支隊長以下先遣隊の大部は戦死を遂げるに至り、生存者百数十名はタイボ岬附近に後退し同地を確保しつゝ後続部隊を待つの已むなきに至った。

地上兵力を以てする第一回の反撃もかくして空しく終り、敵は二十日よりガダルカナル飛行場の使用を開始した。

地上兵力の増強企図

一方、一木支隊先遣隊の派遣の際、その残部は二十二日輸送船二隻によりガダルカナル島に上陸させるよう決定されていた。又第十七軍司令官は十九日、一木支隊先遣隊が十八日夜の上陸に成功し西進を開始せる旨の報告に接するや、地上反撃を強化して一挙に同島を奪回せんことを企図し、歩兵第三十五旅団（歩兵第三十五旅団長川口清健少将の指揮する歩兵第百二十四聯隊基幹にして、爾後川口支隊と呼称）を二十八日輸送船二隻によりガダルカナル島に上陸せしめる如く部署し陸海軍間に所要の協定を遂げていた。

然るに八月二十一日夕に至るや、ラバウルの陸海軍司令部には一木支隊先遣隊の攻撃が失敗し、同部隊が著しい苦境にあることが朧気ながら判明し、越えて二十三日には同部隊との一切の連絡手段が絶えた。ガダルカナル島に対する地上兵力の増援は急を要したが、敵水上部隊の活動状況に鑑み、一木支隊残部の上陸は終に二十四日に延期の已むなきに至った。今や一木支隊残部及び川口支隊の両部隊はトラックの輸送船上にあって、聯合艦隊主力の支援の下に行うガダルカナル上陸のために待機していた。

第二次ソロモン海戦

先に米軍のガ島上陸の報に接した聯合艦隊主力は山本司令長官の直率の下に内海基地を発して南東方面海域に進出中であった。二十一日、第二及び第三艦隊はトラックの南東方を南下中であり、聯合艦隊旗艦はトラック西方にあった。

八月二十三日、第二及び第三艦隊はソロモン群島北方約二〇〇浬乃至四〇〇浬に進出したが、一木支隊残部の輸送船団はガ島北方三五〇浬附近において敵機の触接を受けつゝあった。敵はガ島の基地航空兵力及びソロモン群島南東海面の機動部隊とを以て我が輸送船団の近接に備えているものと判断された。そこで聯合艦隊司令長官は一木支隊残部の揚陸を二十五日に延期し、二十四日は聯合艦隊海空の全力を以て敵機動部隊の捕捉撃滅及び基地航空兵力の制圧を行うべく下令した。尚かねてトラックで乗船待機中の川口支隊をも本戦機に乗じて二十八日ガ島に上陸せしめる如く処置するところがあった。

第三艦隊は索敵の結果、二十四日午後スチュアート島の南方海面に敵機動部隊を発見し直ちに攻撃を開始した。第一次空襲部隊は敵空母の先制攻撃に成功して、その一隻を大破他の一隻を中破せしめた。第二艦隊はこれに協力して其の戦果を拡大せんと企てたが敵が避退したため燃料の関係上追撃を断念するの已むなきに至った。

この間第二艦隊の別動隊として分離行動中の小型空母竜驤は午後一時以後敵の連続攻撃を受け午後六時遂に沈没した。又一方一木支隊を護衛していた第二水雷戦隊にも一部の損害を生じたので同部隊は更に西北方に退避せしめられた。大本営はこの海戦を第二次ソロモン海戦と呼称し戦果空母一大破、空母一中破、戦艦一中破と発表した。[註]

註　米側正式報告による損害は大型空母一（エンタープライズ）大破である。

ガ島に対する船団輸送の中止―鼠輸送

第二次ソロモン海戦の状況以上の如くであったが、この戦果を以てしては一木支隊の二十五日船団上陸決行のためには不十分と認められた。よって聯合艦隊司令長官は二十四日一木支隊第二梯団の護衛兵力を以てガ島飛行場の砲撃を命じた。同夜駆逐艦五隻は飛行場を砲撃したが敵機の行動を制することが出来ず、二十五日午前六時以降正午までの間一木梯団はガ島を基地とする敵機の連続的爆撃を受けて損害続出し揚陸の見込みが立たなかった。二十六日、聯合艦隊司令長官は部署を変更して再挙を図らんとしたが、同日使用可能の基地航空兵力は戦闘機一九、中攻二九、飛行艇四に減じていた。

聯合艦隊司令長官はこの情勢に鑑み、航空勢力の増勢を得て敵基地航空を制圧し得るまでは船団によるガ島揚陸を断念するの已むなきに至った。よって聯合艦隊司令長官は百方手段を尽して航空勢力の増強に努力すると共に、ガ島の急に応ずるため、高速艦艇を以て敵機の空襲を避けつゝ陸軍部隊をガ島に輸送することとした。この輸送は主として夜陰に乗じて鼠のように行われたので鼠輸送と呼称された。かくして一木支隊残部はボーゲンビル島南側のショートランド島に、又川口支隊主力はラバウルに廻航揚陸され、爾後は鼠輸送によってガ島に送られることとなった。

駆逐艦によって輸送されることは陸軍部隊の好むところでなかった。それは、重兵器及び補給品の輸送に大制限を受け上陸後の作戦及び戦闘に著しい不利を齎らすものであったからである。事実、この輸送方式によって爾後ガ島に送られた部隊は、司令部及び人員と軽兵器は有しても弾と糧食と足を有しない結果となるのであるが、兎も角本鼠輸送は八月二十八日川口支隊の一部の駆逐艦輸送を以て開始された（続）

ガ島周辺主要地名図

協会より お願いとお知らせ

理事長　菅原　道熙

一、会員増加運動へ御協力下さい。

平成15年年頭の会員数は、遂に二千五百名を割込むに至りました。一方会員の物故者と、音信不通（会費未納）による除籍退会者は、年々増加の一途を辿っていることから、協会は昨年秋から積極的に会員増加運動に取組みました。

方法は、

1、協会のホームページをより充実させる。

入会のしおりを作成して、

2、不特定多数の参拝者、見学者が集まる、靖国神社（遊就館）、知覧特攻平和会館、加世田平和祈念館、八重山平和祈念館、世田谷山観音寺に入会のしおりを配置する。

3、旧陸海軍のOB団体、戦友会、同期生会等にお願いして、入会のしおりを会報に同封して配布、或は会報に入会案内の掲載を依頼する。

以上の3通りで実施致しました。

その結果運動を開始してこの1年余の間に、新規入会者は約千七百名に達しました。

2では、予期に反して殆んど見るべき成果は挙らず、入会者の圧倒的多数は、3に依るものでありました。

会員の中で、戦争体験世代と非体験世代の完全な世代交替は、そう遠くない先に到来致します。この事を考えると、特攻の史実とその精神を受継ぐ世代の会員の獲得に、全力を投球しないと、受け皿が整わないことになります。

そこで、本号に同封致しました入会のしおりを活用して戴いて、お身近に頼もしい方がおられましたら、是非当協会への入会をお勧め下さいます様に、お願い申し上げます。

皆様方が、一人宛入会者を開拓して下されば、途端に会員倍増が達成されることになりますので、宜敷く御協力を賜ります様お願い申し上げます。

一、入会者・物故者欄の開設

本号から、入会者と物故者の掲示欄を設けます。本号には、今年の初めから9月末日迄の分を一括掲示致しました。

一、特攻観音堂の改修工事

7月から改修工事は始まりました。当初九月に終わる予定でしたが、基礎の一部及び白壁等の補修も行なわれ、年内に完工の予定であります。改修工事開始以来、特攻平和観音像は本堂の聖観音像の向って左側に遷座されていましたが、9月23日の年次法要では、特攻観音堂の本来の場所に戻されてありました。

御住職からは、多数会員からの御寄進があったことに、深甚の謝意が述べられました。

その後の寄進者芳名（4月～9月）

（東京）山本年男　（神奈川）二階堂悌二郎　（福岡）川井美保子

寄進累計額　四百三十六万六千円

寄進者数　一千八十二名

一、特攻59号6頁、3段4行と4段6行、靜養堂→精養堂に訂正願います。

60号正誤表

頁	段	行	誤	正
13	1	30	6月	7月
13	2	2	楊田坂	湯田坂
25	3	9	甫造	甫道
44	1	30	遺霊	慰霊
48	1	30	末吉	又吉
48	4	15	沈頭山	枕頭山

世田谷新聞に出ていた 特攻観音年次法要の記事

廣嶋　文武

昭和19年10月、比島周辺海域にアメリカ大機動部隊が集結、戦局あわただしく展開するなか、日本連合艦隊は10月18日、捷一号作戦の発動下令し決戦に臨んだ。これ以上の後退は許されない戦だった。翌19日に特攻攻撃が決定され、10月25日、関行男大尉率いる最初の神風特別攻撃隊敷島隊が敵艦に体当たり攻撃を敢行した。関大尉23歳。母一人、新婚間もない夫人の面影を断ち切って、十死零生の空へ飛び立った。以降大尉に続いて五八二五名の陸海軍の若い兵士たちが特攻散華した。

その若い兵士たちを偲んで、53回目の特攻観音法要が9月23日世田谷観音寺（大田賢照住職）で営まれた。大田住職の特攻平和観音経、山本卓眞奉賛会会長の祭文、遺族・戦友代表の追悼の辞に続いて熊本哲之区長が挨拶に立った。「尊い生命を日本の為、日本国民の為に捧げた人々のことは絶対に忘れてはなりません。その方々の御霊にこたえるためにも、平和都市たらんことを宣言している世田谷区は平和への努力を尽くし、平和の尊さを訴えてまいります」という熊本区長の一語一語は、参列した遺族や戦友の人々に深い感動を与えた。「海ゆかば」の全員合唱が観音寺の本立にひびいて、焼香の列が続いた。

小泉首相は靖国神社参拝の理由を述べるにあたって「心ならずも戦争の犠牲となった英霊云々」と度々言っているが、この言は特攻戦歿者の心情を逆撫でするもので憤慨に堪えない。彼もまた東京裁判史観に基ずく、戦後学校教育に洗脳された一人だったのか。

新入会員名簿

（平成十六年一月一日～九月三十日）

北海道

朝日明　飯田尚久　上條経夫　河田正義　黒島宇吉郎　小部正好　駒場剛太郎　佐藤和司　佐藤堅　神馬文男　鈴木繁治　鈴木昭　関屋二郎　田垣親雄　高橋清　田湯聖禮　丹保三郎　千葉孝　時本文雄　橋爪覚次　新保宣彦　荻野巌　松本宣夫　町井渉　山本利雄　渡辺廣正

青森

大沼淳四郎　工藤順三　工藤哲男　田中誠治　角田文男　中西昭治　信平勝雄　大和誠

岩手

及川忠平　大内雅孝　小野寺貢　菊池誠　葛巻久八　佐々木茂雄　佐藤庄造　千葉廣　辻村文隆　照井吾　畠山一男　横澤武　藤枝福蔵　道又亨　吉田宝一

宮城

飯澤耕作　伊豆田恭蔵　伊藤尚一　岩崎安　海老名三郎　大泉文男　大村智一　小山田幸二　菊地善男　今野源吉　鹿目泰　末永政志　高橋仁　高橋守　畠山赳　永見智　村田宏生　早津順久　矢田慶治　柳川隆

渡部市郎　浅田嘉美　石川重一郎　伊勢眞佐實　伊藤正雄　加藤豊為　木藤正一　熊谷貞夫　作左部貢　佐藤博　土田三喜　木村義雄　斎藤忠治　佐藤定雄　近江泰

秋田

山形

福島

大内國正　加瀬恒一　加藤芳男　兼子満雄　木野内重三郎　小林正昭　斎藤四郎　齊藤忠信　佐藤敬義　濱崎次郎　福原利夫　水野谷芳郎　吉田正文　脇屋隆治

茂城

飯塚網紀　石川進　市村續　大貫光久　川島禮一郎　菊地嘉明　木崎真

工藤昭次　栗原芳男　栗原二郎　五井平一　崎山忠作　佐久間知彦　佐野文彦　重田豊蔵　住谷定　信田安治　砂押和彦　作左部貢　佐藤博　土田三喜　木村義雄　斎藤忠治　佐藤定雄　近江泰

栃木

浅田尚　大柿隆　岡田昭郎　岡本甲子　菊地昭夫　片山一郎　栗林白岳　酒井昭治　島田三郎　高野展昌　三村フミ　秋山次男　荒木精一　石原栄二　伊勢經次男

群馬

増渕克幸　増田栄一　野村又一　根本栄　常井成一郎　谷沢美三雄　蓼沼弘治　谷地一　安田幸保　宮本正男　松田政雄　笠原すい子　恩田一　奥山博　大澤博　大久保武治　大江浩　薄衣岩雄　新水勝　明平廣太　青木久子　安済美智二　森博　本間謙仲　羽鳥忠男　根本徹　小谷野挺進

埼玉

小板橋正治　栗田栄一　西牧照次　中村敏之　中島敏夫　長岡格　永石辰郎　寺田利邦　丹田徹　玉野唯夫　滝澤昭二　高松忠男　高木庄吉　スティーブンドマミコー　須田里吉　清水喜代治　島田恵谷　芝都志夫　斉藤喜和　菊地謙一　川村洋吉　河島慶明　笠原すい子　恩田一　奥山博　大澤博　大久保武治　大江浩　薄衣岩雄　新水勝　明平廣太　青木久子　安済美智二　森博　本間謙仲　羽鳥忠男　根本徹　小谷野挺進

馬郡道生　初野實　浜屋孝哉　原勝洋　半田幸弘　樋口栄二　末広寿男　弘中昭夫　柴田正雄　作田博　在原盛　許斐淳司　小須田朝安　木村幸男　河原田七郎　川内典二

千葉

青木宏　朱谷真人　生沢久　市東亀世　稲田敏郎　井上茂樹　岩田万喜寿　岩山俊雄　宇井忠一　植野珪　上原博　内田稔　楳田良則　江澤豊吉　江田一成　大内輝夫　大木五一　大田中雄　大津幹雄　大橋収司　笠井溢三　勝田実　勝又博　柄澤尚孝

山岸秀夫　森田由夫　村田幸之進　増田利雄　細渕義信　福島幸平　福岡定男　弘中昭夫　末広寿男　樋口栄二　原勝洋　半田幸弘　高田源二　関川源三郎　鈴木柳吉　鈴本信之　鈴木一郎　杉村昭夫　島田幸治　柴田正雄　作田博　許斐淳司　小須田朝安　木村幸男　河原田七郎　川内典二

高橋光男　高橋兼次郎　高野晴彦　高橋一郎　荒武正典　網野泰　阿部泰助　阿部一郎　阿久津正男　阿久津正男　秋葉義孝　赤井英夫　青山一正　青木信雄　相部一正　梨子本寛　米良成美　山本亘　山崎重蔵　八木章

萩野明秀　額田昌弘　奈良泰夫　中里重治　戸部清　長谷川多度　平田道廣　平野勝尚　平野隆夫　平野保　廣瀬雍熙　福森政雄　前田昭一　松田典雄　三谷博信　緑川浩　宮崎忠夫　明圓昭二　武藤一彦　森永清隆　八木

伊集院雅秀　石山正信　石積誠一　石川淳一　石川一夫　池谷高次郎　有馬豊　今井十四三　井上弘　井上孝之　岩城正保　岩崎昭男　岩瀬敬子　植草義四郎　上平滋男　内田孝吉　内野茂夫　馬越久男　梅田光明　江尻次雄　大孝義　大泉文男　大浦次郎　大川茂

大川健郎
大越琢弥
大塩澄夫
大谷近江
大槻隆
大穂園井
大平剛
大家義胤
大森晋
大穂孝子
岡崎寄幸平
岡田清
岡部俊久
岡田淳巳
小川正三郎
尾崎生男
小佐野芳江
香川明
柏木薫
加藤嘉之輔
加藤安吉
門馬将義
叶茂光
加納信雄
上保昌幸
川崎勝也
川辺三郎
北沢俊男
北村昭広
木下義弘
木原徳二郎
草開省三
国田宏
窪田隆
桑川武久
黒澤聡
小泉孝義
河野一欣
後藤久記

木場健一
小林茂
小林夫
小林達
小林雄三
小林義郎
小前昌次
小松隆夫
小松原公夫
近堂純司
酒井剛
佐々木壽
佐藤平一
篠原弘明
柴田武文
柴芳之
芝山薫
渋井英夫
清水昭俊
清水素郎
庄司和晃
東海林宗芳
勝谷保
(株)新人物往来社
諏佐道太郎
鈴木利次
鈴木洋一
高沢努
高野忠
宝井梅星
滝澤勇吉
田口光男
田島義人
多田光利
田所茂男
田中源治
田中敏昌
田中靖浩
谷尾昭一
玉木佩

玉田恵信
田村庄次
村田房保
塚原正
辻奥児
津島裕
筒井英治
鶴田聡
小松原公夫
小林達夫
小林雄三
小林義郎
小前昌次
小松隆夫
小林木壽
近堂純司
酒井剛
佐々木壽
佐藤平一
篠原弘明
柴田武文
柴芳之
芝山薫
渋井英夫
清水昭俊
清水素郎
庄司和晃
東海林宗芳
勝谷保
(株)新人物往来社
諏佐道太郎
鈴木利次
鈴木洋一
高沢努
高野忠
宝井梅星
滝澤勇吉
田口光男
田島義人
多田光利
田所茂男
田中源治
田中敏昌
田中靖浩
谷尾昭一
玉木佩

原田玉
原田敏
原田照
林國寿
林陽久
早川一喜
浜口猛比古
馬場正榮
花田隆
廿日出昭信
橋本清
栢沼貞雄
能瀬輝雄
野地二見
野崎義夫
野村健一
西村誠
西村孝
西村造
西川光男
成富暢三
成川一雄
梨岡寧
矢島忠純
中村武夫
長島安治
長嶋富三
永井勝一
鳥海周一
豊岡秀雄
富安久
富樫利男
寺田俊夫
鶴田聡
筒井英治
津島裕
辻奥児
塚原正
村田房保
田村庄次
玉田恵信

原田宏
菱田一雄
日高恒太郎
平松照久
深堀恭一
福島清
福田祐理
福永萬壽夫
藤井光春
藤野貞
古川卓一
星野博一
堀内崇
本多昭二郎
前澤玄
松浦勘次郎
松浦登士郎
松下朝男
松島早苗
松田幸雄
松永太
丸谷定弘
馬奈木敬宏
三木秀雄
三澤由之
三森茂郎
三屋益道
南谷金明
三橋一也
三橋栄一
三春仁
御法川芳夫
三宅義行
水町博勝
宮崎恭一
本吉俊雄
百目鬼清
守屋汎
矢可部一敏
八島康次

柳正雄
山上薫
山口昭太郎
山際恒
山本昇
山本茂
山本年男
山本裕士
横瀬富一
吉川和篤
吉原瑞穂
若林繁雄
和田昭
渡邊瑞正
神奈川
赤崎正則
阿部満
新垣清松
有井包廣
飯田隆介
池田立
板倉孝敬
伊富貴清
上野明男
内山正一
大倉馨
岡崎宏平
岡野實
岡村恒昭
小澤武彦
小野益雄
甲斐久勝
金子敏夫
河本憲恵
北川甚吉
北澤一俊
北澤一
黒田惟喜
清須隆次
小池教仁
向坂

小林興孝
宮崎真一郎
古明地正雄
是近寿
近藤久三
今野一郎
志岐次男
鈴木敏道
鈴木淳夫
高尾進
高梨久義
田代重明
谷垣尚
千里久民
寺田隆好
妻鹿嘉兵
富原郁夫
豊田行雄
内藤奎爾
永井一成
中川一
中野昭二
中谷一夫
伊藤清
二階堂悌二郎
二宮和郎
西館和之
野口栄輔
野地増夫
野澤武彦
萩原真澄
羽田洋
羽田正二
早川昭
原田昭
日比野臣三郎
平宗一
平田尚之
平塚俊
広瀬勉

福間一
福井竹夫
藤田武
藤森正保
藤木純一
古川孝子
古谷八
本多正
町田速雄
松尾繁一
松野清司
真柳敬
三橋理人
宮本弓
宮本忠弘
宮田博信
村田宏
和才寛誠
若山利一
米山
吉田好盛
吉川俊治
山縣武
山内潮香
安部光亮
森山健次
森本宏
橋文
新潟
渡辺浩志郎
楚山信英
板倉信治
大塚喜衛
大図三郎
小池久弥
小林英雄
坂詰撰二
諏訪宏
高橋久春
高橋雄男
廣松幸男

田村正夫
鳥羽欽一
鳥飼一
羽山清
平野良助
星山浩
山本赳
吉田
富山
北島和昭
北熊一敬
小澤田寿朗
嶋田千里
塚本一郎
鶴乗直孝
中島靖夫
森野正
森本文次
山下宗男
石川
奥田正則
長田信一
落合正
河辺弘
川原善一
北野三郎
嶋田藤一郎
神保外巳雄
辻本正也
辻本正
藤田瑞悟
堀川昭
本田
森慶茂儀
山岸
福井
太田義雄
谷口昭
中島二輝

藤堂武
藪内登
山口忠雄
山口文男
石川源郎
小池高
小林国勇
清水保
高田賢支
月野木久
筒井紫朗
樋川清則
守屋千尋
山寺嘉一郎
山西孝治
長野
遠藤正
小田中佐太夫
折沢聖
垣内一郎
熊谷政人
小林清完
塩入春雄
五味一徳
佐藤一志
園原公正
高畑隆雄
中山誠一
根津晴之
柳沢二郎
岐阜
荒川達
岩井浩次
大林喜一
佐橋昭二
澤田健
炭竈三郎
瀬上斉二郎
田内實

豊田寅機
藤井亮一
古川利雄
槙林茂夫
松田昭兄
松原正彦
村山茂智
横山早巳
静岡
秋山勇
淡谷秀一
池田静夫
内野文一
海野俊作
大井重平
太田静男
大橋虎之助
加藤昭徳
鐘川東洋男
金子一郎
佐藤一郎
杉山郷太郎
鈴木震也
鈴木洋平
墨田延生
高橋昇
田中貞蔵
土田裕
寺田喜久雄
寺田直平
鳥居輝夫
疋見義弘
平岡辰夫
平田重夫
別役俊一
古見哲夫
洞口広司
本間武美
増田秀雄
松下魏三

水口四郎
山口善市
山下清
村中
米原明
山本陽一
山野讃
愛知
石原金三
伊藤久男
伊保武美
遠藤皚
遠藤十三郎
大河内喜代一
大澤祝一夫
大場敏一
奥村真五
長田宏郎
尾島貞美
加藤和男
加藤宏
河辺勇
北原光次
木村一吉
鬼頭安治
小出勲
小口圭介
坂井聰昭
櫻井一郎
杉本保正
高田透
田中英
田中博
丹羽素
中川重彦
中北武
中野裕
野村正峰
羽田英男
廣瀬金三
水野清

八木晃
安生晃一郎
山口勲
山田明典
山口修一
渡邊均
三重
新井郁男
今西雅夫
伊藤正巳
石川四郎
大平司
大垣誠三
久村登
久留内昇
豊田照彦
藤村孝
二井重吉
堀端正一
前川英郎
三林重一
吉村義美
井上修
金森明
小菅外登雄
斎田伊佐夫
筒井澄
疋田三喜造
平居新市郎
森崎武一
山田茂樹
京都
有田恭平
大谷
大西賴美
嶋本久代
寺浦聡一
富森正起
中村一郎

藤田進
松本太郎
水谷幸正
米田信
伊勢田外重
糸瀬淳
井上勝蔵
上田信雄
上野勲
牛山武俊
江口宏洋
岡田豊
岡田
小田嶋道正
上久保典良
川人盛幸
川村次夫
喜多康巳
北山武
木下秀夫
佐々木研彰
谷口政夫
辻孝次
都築進
土原清
釣上治三
寺田冨美雄
東野嘉之
中野忠和
高畠毅永
高橋賢三
高井宏子
大阪
仲林聡
藤村呆
二見久恒
船橋一
三宅好美
宮崎喜一郎

目連賢一郎
本島重治
安井松男
石川昌利
今井奈良治
江村茂夫
大山三男
日下功
北山禎彦
河野隆志
粕谷隆
尾関南山
W・エドワーズ
奈良
賀集義忠
業天正文
腰高ゆたか
坂本有
崎島十四夫
清水芳郎
菅原芳夫
杉本良員
高橋正直
高畠厳
竹内徹
竹田達
都築保
中川一男
中西宏
長川耕一
名越正明
西川浩二
西田英夫
野口昌之
林弥寿夫
廣井瑞希
深谷林三
福田精一
福田光幸
別所末一
丸木利郎
三木良明
三谷富彦
宮川永信

吉村保人
笠井智一
長澤満智子
仲西勇
西垣幸三
林芳弘
林信行
深谷芳男
福井喜三郎
藤田栄一
松山敏夫
和歌山
大江宗次
中山清太郎
山田逸平
若林康弘
鳥取
内田幸治
内田穣
大岩重夫
太田繁市
岡本孝夫
備本博夫
難波金一
林原正典
山根岩雄
島根
石田茂夫
金崎正美
曽田泰民
西代正信
福庭吉一

岡山
赤木昭
岩藤良平
片岡薫
角南加男
木浦正一
清水正志
田口哲郎
田邊整市
田中
日下昌秋
野尻
早川毅
林幹彌
原田晴司
本田巽
水口伸一
森安茂
吉住泰明
広島
東秋光
池田豪良
伊藤利一
植村重利
宇野豪
大原満穂
岡崎明
尾崎朗
兼田肇
本浦
河野道太
小玉政幸
佐々木哲二
白川和典
堺水尾幸人
田中博清
田口昭夫
冨田豊
智谷覚三
中村仁三

野上憲助　長谷川定男　花谷正　日野研三　平尾久男　松本良利　水内三郎　道土井圭次　宮脇隆　村田孝　安岡幸義　山田博　山本正人　養祖信行　吉岡喜一

山口

岩成峰　岡田博忠　小田忠義　鍵本栄一　亀田隼視　亀山俊雄　佐川典男　重国栄一　下枝淳成　下村雄一郎　赤梨政人　田口成男　田村誠一　徳本常夫　中村俊則　野川喜快　古谷進　松本悦郎　村田俊夫　山本芳夫

徳島

赤松茂幸　稲木良明　上田耕作

内輪進一　枝川旭　逢坂亘　片山敏晴　加藤蔦子　北谷正晴　小山弘　武田巳広　野田誠作　林泰　松本義雄　三木茂久　若田治良

香川

小路倶視　坂下昌弘　左光幸男　竹内良雄　多田野弘　田中侑　都谷榮一　中江正夫　野村高茂　林寛　藤井鹿次　森政勝　山崎弘　山下玉太郎

愛媛

青木恒男　大平博　梶原茂文　佐々木義廣　杉野富也　高木弘　竹内智子　武田静雄　旅井理喜男　福山泰正　松本憲二

森公一　矢野勉　吉岡友睦

高知

村越正清　杉田陽一郎　西尾一雄　濱田耕一　福田俊彦　眞嶋富雄　森田幸男　森脇三男

福岡

㈱九南　姉川貞隆　井上泰徳　植田豊治　浦野紀男　大石嘉道　大村昴　梶山修　加藤豊二　川井美保子　川崎栄一　古賀照生　小林孝雄　迫博文　島崎謙　城戸忠勝　杉谷忠治　高倉誠　高橋主税　高畑政之　堤益角　手島勝喜　時松喜志男　中島豪　中田俊夫　中村哲人　南里三郎

野口竹夫　野村純雄　原明治　平松照雄　松永義時　松本秀敏　丸田俊雄　三井孝昭　宮本登　村上トシ子　森可成　森川重成　守谷芳雄　八尋欽二　山内昭三　山口芳丸　山崎重信　山下正美　大和昇　吉瀬善之助

佐賀

貝原多守　田栗薫　野方穂　前谷八郎　森田登

長崎

井口清人　伊藤保彦　大久保不二男　末次辰夫　末永静子　中島忠雄　平岡房雄　藤直記　松尾久　松尾茂雄　松永行雄　本山彰亨　山口慧心

山口博純

熊本

赤澤詮立　荒木孝　岩切啓一　岩崎久幸　大村精一　小栗一利　樺島節子　上嶋正敏　川口孝行　小島武徳　佐藤武　杉本豊久　高島州三男　田中義人　田中良　寺本秀雄　橋口俊一　早田亮彦　尾藤健二　山内新

大分

伊勢三郎　大竹照寿　尾立昭典　河津武　川邉公平　島津裕子　鈴木克美　園田醒吉　武内光義　田島吉夫　田代義信　田邉政子　中嶋憲一郎　中田正延　原田耕作　平野義美　弘蔵初音

福田保光　藤谷新一　南實　身深一朔　柳井雅宣　矢野義生　山本茂　吉村功

宮崎

池田初美　江尻瑛　小田兼裕　樺田資孝　木野喜一　河野茂義　高野幸男　清水利幸　竹内周　河野三郎　橋口明　矢内守義　山下重幸

鹿児島

石神大成　今村斉　上野文隆　折田武士　木房実　佐藤福男　篠原邦秀　下園愛吉　祝迫剛　新川肇　新野敏　外山寛樹　竹下清新　鶴村勇　中住素　中村登　平瀬一郎

松崎誠　松山芳正　米丸要次郎　脇丸孝志

沖縄

金城興太郎　平安名盛文　松島寛容　屋比久玲子

会員訃報

遅ればせながら謹んでお悔み申上げます。

○**山形**　奥山満男（16・1）

○**茨城**　鈴木藤太（15・11）　森田治昇（15・2）　吉田穆（15・12）

○**千葉**　足立敬（15・11）　石引森男（・）　下山要（16・7）　黒川滋（16・4）　工藤俊二（15・10）

○**東京**　坂元盛道（16・3）　志村正（16・5）　佐瀬達雄（16・8）　鎌田誠喜（・）　富田幸雄（15・7）　岡田輝彦（16・1）　加藤貞夫（・）　川合了（16・3）　小嶋五郎（16・1）　藤本晴久（・）　澤田芳治（16・6）　榎本武次（16・1）　服部敬七郎（・）

○**神奈川**　清水孔司（・）　下里勝美（・）　倉石龍雄（15・12）　江本善次（15・8）　江澤啓（16・6）　澤田尚（・）

○**富山**　塚田弥二（15・12）　茂住光雄（15・8）

○**長野**　高橋信行（16・4）

○**岐阜**　上田彰（16・1）

○**大阪**　高橋俊雄（15・10）　小堀義一（16・1）

○**兵庫**　中島幸男（14・）

○**奈良**　吉田之久（15・3）

○**福岡**　桑野春美（16・1）

こころざし同じくせられし人々の
逝きしを悼む悲願ならずに
特攻のみたまに逢いて黄泉に
なに語るらんうつしよのこと

台湾・宮古・石垣特攻発進基地巡拝慰霊旅行報告（下）

菅原　道熙

屏東・宜蘭・石垣島

星埜　清滋

4月19日からの台湾・宮古・石垣特攻隊発進基地慰霊旅行に参加するに当り、私としては自分が行った土地及び戦友等の関係ある場所が多いので、首記の3ヶ所について記述する。

屏　東

昭和19年4月、明野乙種学生を修了して赴任した108教育飛行聯隊は1・3中隊が屏東、2・4中隊がその南の潮州に分駐して97戦斗機で戦技教育を実施していた。聯隊長は後に65戦隊長に転出した石原少佐で、中隊長は陸士50、51、53(2)期出身の戦斗操縦者であり、既に6ヶ月前明野を出て赴任した同期航士55期は5名も在隊しており、現役将校特に陸士出身者の多いのに驚いた。内地より空便なく門司港から輸送船にて3泊4日、高雄港に辿り着いて着任した。

屏東空軍基地正門

この度訪れた屏東は軍民共用で軍の営門前迄しか行けず、向って左側、屏東航空站と表示された建物は、民間用空港ターミナルと判断された。営門を真直ぐ行けば多分右に旧部隊本部の建物がその侭残っており、左側に一部舗装の滑走路が見られる筈と思ったが、営門正面には近付けず想像に止めた。

我々が着隊した当時は少飛10期の戦技訓練の末期であり、単機戦斗訓練中に97戦2機が空中で上下交叉し、下方機の操縦者の頭部が一部飛散する事故があり、下淡水渓畔に落下した機の遺体収容に行った記憶がある。

少飛10期は我々転科操縦者と技倆的にも近く、戦争後半の戦力中枢と思われており、特攻機より特攻直掩機に選ばれ戦死者も多かった期と思われる。

この108教飛聯は昭和19年2月の改編で、8、22、33、37の各教育飛行隊に別れ、8、22は台湾に、33は比島に、37はジャワに分駐することになり、私は33教飛所属で比島ネグロス島サラビヤに19年3～6月、7～10月はバナイ島サンホセで特操1期の戦技教育に当った。

屏東時代の同期岩本照は22教飛より105戦隊に変り、3式戦で20年4月宜蘭・石垣より沖縄攻撃で戦死している。彼の生前を偲び謹んで哀悼の意を表する。

宜　蘭

4日目の朝花蓮のホテルを出た頃、当地在の台湾空軍のミラージュと見られるジェット戦斗機が、訓練飛行で低空を飛び去り、大陸との緊迫感を覚えつつディーゼル特急列車で、東海岸の景色を眺め乍ら、1時間20分、宜蘭に到着した。

60年前にはこの海に数多の輸送船が、又航空機が海没して、海流の関係で死体が余り上らないことを思い出して、無念の思いを抱いて逝った戦友の冥福を祈る。

台湾の鉄道は日本統治時代からの名残りと云うより技術的問題で、道路は高速、一般共に右側通行になっているが、鉄道のみ駅構内の線路の改修が大変なので現在も左側通行となっている。花蓮―宜蘭―台北線は単線だったのが複線化されていた。レールは旧日本の37キロ軌条を使用しているのが見られた。

宜蘭駅にはほぼ定刻に着いた。日本並みの正確なダイヤであったのは、日本から良い点を受け継いだ現地当局の

宜蘭北飛行場滑走路跡

努力の賜であろう。

先ず訪れたのは旧北飛行場跡の右岸河川敷である。幅は5～60メートル、長さは千メートル余りあり、滑走路として現在でも充分利用出来ると思われた。私が昭和20年7月10日頃パレンバンより独飛24中隊の先遣として、コタバル～プノンペン～ツーラン～広東（大河）～台北を経て当地に早朝着陸した時は、今の様に青草が綺麗に生え揃ってない荒地で、東から西へ降りるのに、東端近くの堤防が一寸邪魔な感じであったことを思い出した。

その後私の隊の曹長が4式戦のエンジン不調で不時着した時に、その堤防に衝突する事故があって、1ヶ月位後に中飛行場を105戦隊と共用することになった。当時この南西に西飛行場があり（今回訪問せず）、24戦隊が1式戦より4式戦に改編中で、同戦隊の飛行隊長の池上洋吉は東幼以来の仲であり、1日訪問して未修飛行を見学したことがあった。

北飛行場跡を訪れた時、ガイドにより西郷隆盛の5男と言われる菊次郎が、明治30年当時の庁長（郡守）に着任以来、治政特に宜蘭河の治水に多大な尽力をして農業振興に役立てた功績を讃えて、現地有志が建立したという「西郷庁憲徳政碑」が、堤防の西端橋梁脇に現存することは、日本及び日本人の台湾に対する善政の証であり、現地住民の友好の絆として永久に残したいと思う。

この北飛行場には私が降りた頃は、独飛43中隊の軍偵数機が駐屯して台湾東岸の対潜哨戒に当っていた。ここより市街地南の旧中飛行場跡地を訪れたが、此の地は荒地の侭で所々に舗装の跡が残っていた。コの字型の掩体も飛行場周辺にはいくつかあったと思うが、その痕跡は見渡した処見つからなかった。この飛行場には終戦時105戦隊の3式戦が2～30機あったと思われる。

吉田戦隊長・川上次郎（54期）飛行隊長・関口中尉（少候）他若干の下士官操縦者は、108教飛からの転属で面識があり、同期で20年4月28日戦死した前記岩本照の最後の模様等聞くことが出来た。105戦隊も8飛師の中で自発特攻を行い、この宜蘭或は石垣より沖縄本島にかけて多数の戦死者を出した隊だった。

当地での思い出としては、終戦後の8月18日飛行禁止になる前にと、街の人の我々への態度の急変に対応して、在宜蘭全機を以って示威飛行を実施した処、現地の住民より「日本は何故戦争を止めたのか」との声が上り、治安恢復に役立った。

又接収に来た国府空軍の技術中尉は、蘭州で日本軍の空爆に遭ったと言っており、日本の陸海航空部隊は中国空軍（終戦直前陸海軍より独立）の接収を受けるので、地上軍の使役要求には応じない様にとのことで、毎日飛行場に並んだ飛行機の試運転を励行するのみで、苦役はなかった。

当地では飛行部隊の操縦者は、市内の日本人旅館の2階に合宿していたが、終戦後は私共は枕頭山という所のバラック急造兵舎に起居して、飛行場迄出向いた毎日だった。

石垣島

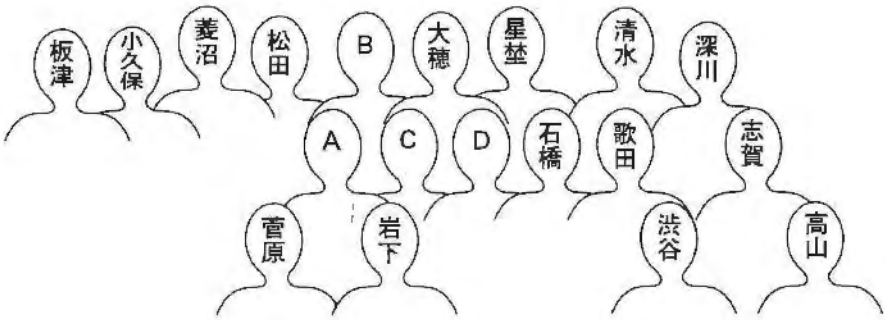
6日目宮古島より当地に来た。私は現空港が旧海軍飛行場であった昭和19年3月、33教育飛行隊に変って訓練機を大刀洗航空廠から、知覧―那覇経由花蓮港・屏東迄空輸して、更に比島に運ぶこと数度に及んだが、天候不良で当地に不時着1泊した覚えがある。2式単高練に落下タンクを付けての空輸の大敵は、機関故障と天候であった。那覇を出て1時間すぎても宮古島を発見出来ず、洋上500米位の飛行を続け、やっと平板な宮古を発見通過したが、とても花蓮迄は無理と判断して、当地海軍飛行場に無事着陸した。海軍の対潜哨戒艦爆が数機駐屯していた程度で、陸軍の飛行場建設は遅れ馳せ乍らその後急速に進んだ様だ。

石垣島・沖縄特攻・伊舎堂用久と結ぶ構図は、終戦直前南方から台湾宜蘭に着いてからのことである。我が同期生で沖縄特攻の先達となった戦友、伊舎堂用久君とは昭和16年6月下旬、陸士卒業1ヶ月前に航空要員として研修の為、航空士官学校に派遣された時点に始まる。

修武台の講堂に寝台を持ち込んだ臨時寝室で、各兵科・陸士中区隊混合の航空要員と云う士官候補生が、之から空に巣立つ第1歩を踏み出した初顔合せの時以来の交友である。当然先ず第一に出身地と言うことで、姓名上彼が沖縄県人であると知った。独ソ戦の発生で7月に陸士卒業の繰上げで座間に帰校と云うことになったが、その前に各飛行部隊へ転属（之が航空転科）となり、その後更に大刀洗・熊谷・宇都宮各飛行学校への派遣、基本操縦の修習、次いで各分科毎の明野・鉾田・下志津校での戦技修習から内外各飛行部隊へと配属された。私は大刀洗―明野―戦斗飛行部隊となり、彼は宇都宮―下志津の軍偵の道を辿った。此度当地の墓参で漸く彼と再会した。

彼は宮古中学から本島の県立2中を

慰霊法要を終って（白保飛行場跡）



A. 伊舎堂用八氏　　C. 嘉良悦子さん
B.　同　都夫人　　D. 山里シゲさん

経て陸士に入学、歩兵第24連隊付の士官候補生として満州東安に赴任して、私同様陸士卒業直前航空に転じた訳であるが、彼の友人達の回想等に依れば、誠に軍人らしい一生を過して郷土の自宅より10粁余り離れた飛行場から出撃、昭和20年3月26日早朝、沖縄本島西方慶良間列島周辺の米艦隊に、自ら訓練した僚機並びに掩護戦斗機と共に体当り攻撃を敢行して多大の戦果を挙げ、敵を畏怖せしめ後に続くものの範となった。

彼の辞世は

指折りつ　待ちに待ちたる　機ぞ来る
　千尋の海に　散るぞたのしき

とある。訪問当日空港には甥の用八氏外親族の方数名の出迎えあり、発進基地白保飛行場跡地の「轟橋」上で用八氏を始め当時飛行場関係に勤めていた老婦人2名の説明を伺い当時を偲び、殉国の至誠に感慨を深め、般若心経を唱え「海行かば」を斉唱した。道路脇での慰霊法要ではあったが、東北遥かに沖縄本島を望む飛行場端で感慨一入切なるものがあった。

その後生家近くの登野城の伊舎堂家の墓所にもお詣りした。特攻故に遺骨は還らずではあるが、遺髪・遺爪を埋葬してあると言う。

宮古島は駐留各部隊の慰霊碑等が数

多くあったが、石垣島では戦争とマラリヤの併設の八重山平和祈念館に、故人の遺品が展示されているのみで、せめて飛行場跡の一角に碑の一つでもあったらなと感じたのは、私一人丈ではなかったと思い乍ら本記事を終る。

尚翌7日目私は石垣から一行と別れ、関西空港に直行の為余った時間を、伊舎堂用八氏の案内で島内高所より石垣島を下瞰し、当時を偲び得た御好意に感謝御礼申し上げる次第である。

旧陸軍白保飛行場に近い轟橋付近で焼香を行う財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の人たち

八重山毎日新聞掲載

八重山日報記事

元特攻兵など墓参り

伊舎堂大尉に思い馳せる

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会（東京）による「台湾・宮古・石垣特攻隊発進基地慰霊旅行」のメンバー十六人が二十四日、石垣入り。沖縄戦で特攻隊の第一号として一九四五年、戦死した伊舎堂用久大尉（当時25、戦死後、中佐に昇進）の墓参りなどを行った。一行には、伊舎堂大尉と陸軍士官学校時代、航空隊の要員として一緒に訓練を受けたことがある星埜（ほしの）清滋さん（81）＝大阪府茨木市＝も加わり、かつての同僚に思いを馳せていた。

一行は元特攻兵や関係者などで組織。台湾、宮古、石垣にある特攻隊発進基地跡を訪れ、戦死した特攻兵たちを慰霊しようと十九日からツアーを組んでいた。

最後の目的地となる石垣市では、伊舎堂大尉の甥、伊舎堂用八さん（65）の案内で、伊舎堂さん一家の墓を訪れ、一人ひとりが手を合わせた。

星埜さんは四一年に伊舎堂大尉と出会ったという。「伊舎堂君に、珍しい名前だが沖縄かと聞いたら、そうだと答えた。名前が覚えられて損だ」と笑っていたと述懐。「石垣島出身だと言っていた。しっかりした感じだった。特別な墓でなく、家族と一緒の墓で良かったと思う」と感慨深げだった。

一行はほかに、旧陸軍白保飛行場跡や八重山平和祈念館などを回った。二十五日、帰路につく。

伊舎堂大尉の墓に手を合わせる慰霊旅行のメンバーら

慰霊旅行に参加して

近堂　純司

第1日

成田から正午過ぎ桃園国際空港に到着、バスで新竹、龍潭、八塊の各飛行場を巡り、桃園神社に行く。桃園は戦前は新竹州桃園郡であったが、台湾全体で昔の面影は全く失われているのに、神社だけは殆んど昔の侭の佇まいで、以前参拝した時の記憶が蘇る。

泊った北投温泉は、昭和16年の夏休みに、全島ボーイスカウトの野営を草山（現、陽明山）で1週間過し、台北まで、本間台湾軍司令官作詞の「台湾軍の歌」を、行進しながら歌い、途中大浴場に入浴して以来63年振りで、感無量であったが、風景は全く変っていた。

部屋はダブルベッド一つで仰天し、岩下団長と顔を見合わせ、添乗員に連絡して、直ちに設営仕直しをさせるというハプニングがあった。

第2日

明石総督の基に詣でて、松山空港から立栄航空809便で高雄へ。昼食後屏東飛行場跡を訪れる。

屏東という地名は、昭和10年セメント原料として掘削され、殆んど山容を失った半屏山（ハンピィザン）の東に位置するので、その名がついた。

屏東は、陸軍の第8飛行聯隊が在った所である。親しくしていた渋谷准尉に招待されて、良く御馳走になったり、飛行場の東側の小川で海老や鮒を釣った思い出がある。約6年前から軍民共用となった。

次いで高雄海軍航空隊が在った岡山へ、この基地は、昭和11年だったと記憶しているが、級友の蕭清水兄のご父君（私の父と同業者）である蕭佛助氏が建設した。現在は空軍軍官学校（空軍士官学校）、資料館と飛行機展示場がある。

この基地には、草鹿任一中将も来られたことがある。マレー沖海戦でレパ

ルスを撃沈した壹岐少佐も、昭和13年頃勤務されたそうである。少佐は新竹航空隊の開隊にも関係されたと云う。

台南への景色も勿論すっかり変っている。台南飛行場は、昭和16年10月1日、戦闘機基地として開隊された。高雄空は、陸攻隊を主力として、戦闘機（零戦）も可成りいた。ラバウルに進出し、昭和17年頃多くの撃墜王を輩出した。

岩下団長は、昭和20年1月に、比島から輸送機でこゝに帰還されている。感慨は如何許りであったろう。

バスは、鄭成功ゆかりの「赤嵌楼」へ。此処も60数年振りであった。翌朝団長と宿舎の近くを散歩した。近くに成功大学があるとのこと、道路から判断すると、そこは台南の第2歩兵聯隊の跡かと思われた。

屏東飛行場民間ターミナル

民間ターミナルに対面して立つ碑
バス後方50ｍ位の所に基地正門がある
人物は渋谷多平氏

台南飛行場（民間専用）

第3日

一路鎮安堂、飛虎将軍廟へ、途中廟に関して簡単な説明を行う。特に誤り伝えられているのは、杉浦兵曹長（丙飛6期）が中尉とされていること、火を吹いた零戦を民家に墜落させない様、機首を立直して、海に落ちたという話、実はこの人は、火を吹いて海へ墜落したが、一命を取止めて関西零戦会事務局長をされた、故岩井利造兵曹長である。この件に就いては手記もあり、私も直接ご本人と話したことがある。

旅行参加を決めて手紙を出しておいた、中日海交協会の胡順来会長のとりなしで、私と親しかった呉江池氏の従弟で、医師の呉金魁氏が、管理員の蔡金印氏と2人で待っていて呉れた。

小久保和尚の用意して下さった袈裟をかけて経文を読む。君が代、若鷲の歌、同期の桜のテープで合唱し、無事慰霊祭を終えた。私は靖国神社の神酒や菓子をお供えした。

以前は外にあった大きな筒の貯金箱（賽銭箱）が、小さな箱になって内部に移されていた。3千元入れて外へ出ようとすると、蔡氏が呼びに来て指さす所を見ると、私が約10年前初めて参詣した時、白の艦内帽で敬礼している写真があり感動した。

その後、その完成によって旧台南州と高雄州の北部一帯が灌漑の利を得た、烏山頭ダムと工事責任者の八田与一記念館を見学した。小学校の遠足で行った時とは、見違える程立派に整備されており、台湾人が日本の遺産（日産と呼ばれている）を、凡ゆる面に於て立派に修復保存し、活用していて呉れることに、今更ながら自然に頭が下がる思いがする。

昼食後は生れ故郷の高雄へ向う。高雄の説明は俺にやらせろと、図々しくも添乗員やガイドを押しのけ、頼んで高雄駅や母校高雄中学校前を通り、母校の自慢話をした。高雄神社への道すがら、知事官邸跡、水源池から神社の鳥居、狛犬や階段、更にはバスの駐車場、売店の場所までそっくり昔の侭である。

下車して階段を昇り始めると、上の方から名前を呼ばれる。見ると、一番の親友蕭清水兄である。子供の頃は同じ田町に住んでいた。彼に迷惑をかけても、と詳しい日程は知らせていなかったのに、今日は必ず此処に来ると思って、朝から待っていたと云う。オーストラリア旅行中の長女を除いて、次女から4女までが拝殿近くで待っていて呉れた。お嬢さん達とも1年余りの再会で、手を取り合って懐かしむ。団長以下皆さんに紹介し一緒に記念撮影す

る。

皆さんに差上げて呉れと、良く冷えたレンブと、餅菓子を差入れて呉れたので帰路のバス中で配った。

小湊の甘庶畑を高中の後輩達が戦時中に造成した空港から、遠東航空で花蓮へ。

第4日

花蓮飛行場をバスの中から眺める。数年前と全く変った空港ビル、遠くに見える経国号と飛行場が一廻り大きくなった感じがする。

花蓮駅も見違える程広くなって賑っている。1時間半足らずで自強号は宜蘭へ到着。戦前はこの蘭陽平野は、北部の穀倉地帯であったが、今はどうであろうか。有名な西郷堤はどうだろう、と考えている時に歌田様の実に良く調べた上での説明があった。

宜蘭河の治水工事には明治30年代に4万円が投入され、堤の上には日本統治時代の石碑が立派に保存されている。

又、台北州蘇澳（スオ）郡リョヘン蕃社（旧武塔村）のサヨンの話も添乗員から出て、お調子者の私は一番だけを歌うことになった。

やがてバスは中飛行場跡へ。海原会の小島編集長は、我々が訪れた時には分からなかったとのことであったが、岩下団長は、旅行社が懸命になって探して呉れたのであろうと、感慨深げに申されたのが強く印象に残っている。

聞く処によると、宜蘭には飛行場が3ケ所あったとか。関西零戦搭乗員会新年会で、今中兵曹長から、女学校を宿舎にしていて、先生のお宅でご馳走になったり、上級生は動員で居なかったが、下級生は飛行兵が珍しいのか、よく花束を持って来て呉れた。到々お礼も言わなかったが、お世話になったお礼を言いたいのだが、何とか探せないだろうか、と相談を受けた。

高雄忠烈祠
前列左端蕭清水氏、その右近堂純司氏、その前の3人は蕭氏令嬢

それこそお安いご用で、台湾協会に聞けばすぐ分る。帰宅してすぐ台湾協会に照合すると、「植民地台湾の日本女性生活史」、4巻を出版された著者の中村（旧姓竹中）信子さんから詳しい電話があり、多くの人々と連絡がとれて、今中兵曹長（零の功績・比島台湾編の著者）から、中村さんに著書を送るなどして、大変喜んで頂いた事を思い出しながら、現にこうして飛行場跡に立っておられる歴戦の勇士、言うなれば生きている英霊の方々の心中を察し、むせ返る草いきれの中に佇み、文字通り「夏草や強兵どもが夢のあと」と感じ、急ぎバスに戻って1人で流れる涙と汗を拭いた。

昼食時、海軍兵学校出身の岩下団長のお人柄を慕い、陸軍航空士官学校出身の方が、同じ空の勇士として「先輩」、と呼んでおられるのを耳にして、ほのかな暖かみを感じた。

宜蘭駅の待合室で、歌田様がガイドに「雨に咲く花」の原歌は「雨夜花（ウヤホエ）」で、昭和9年に鄧雨賢（トウウケン）が作曲したものと説明、西条八十作詞の歌詞と、台湾語の歌詞を書いてもらって、一緒に歌ってガイドに教えた。

台北に到着後、忠烈祠の衛兵交替を見学、衛兵と共に記念撮影後、宋美齢経営であった中山大飯店で、建築美を満喫する。6年程前だったか、高雄中同窓会で訪れた時には、火災で上部は黒く焦げていたのが、美しく再建されている。

然し、私は何度行っても戦前の圓山公園遊園地の200米滑り台、圓山動物園、そして台湾神社と重なって仕方がない。

第5日

早朝空港へ。私は田舎の高校の同窓会と重なった為に、残念乍ら帰国の途についた。

今回の旅行に参加して、この協会の今後はどうなるのか、何とか護国の鬼と散った特攻隊員の犠牲を、日本人として永久に顕彰したいが、その為には

1日も早く自虐史観が是正され、正しい歴史観を持つ若者が協会に加入する様にならなければと、1人苦悶しつつ、又皆様方が、宮古、石垣でも充分な慰霊が遂行されることを心から願った。

私にとって台湾を訪れることは、生れ故郷への精神的帰省であります。現在の旅券は3冊目で、数え切れない訪台でありましたが、今回の巡拝慰霊行に参加して、皆様方の真摯で明るいお姿に接したことは、実に意義深いことでありました。心から御禮申し上げます。

特攻慰霊の旅に同行して

高山　友二

台湾、宮古、石垣特攻隊発進基地慰霊旅行に参加、59年の昔を偲びつゝ、慰霊鎮魂の7日間を過ごしてきた。

かつて日本が統治した時の善政の部分が色濃く残り、友好親善の旅でもあったと思う。又現地ガイドの説明は、私たちに元気と自信を与えるものでもあり感銘を深くした。

さて、台湾での慰霊祭は、台南の飛虎将軍廟で行われた。「飛虎」とは戦闘機を意味するとか、此の地で戦死した日本人操縦士の霊を祀り、戦後50余年の長きに亘り、慰霊法要を続けてこられたとか。

祖国の難に殉じた烈士の志を顕彰して後世に伝え、救国人倫を具現されている人々の姿に、日本の武士道を思い明治先人の見えざる光を感じた。

わが国の現在の社会の風潮と思い較べたとき、英霊に対し忸怩たる思いであり、詫びる心で合掌し冥福を祈った。

翌日、宜蘭飛行場跡地に立つ。野草と瓦礫の原、銀翼爆音を響かせたであろう飛行場の面影はいずこへ、まさに往時茫々夢の如く、過ぎ去りし60年の歳月を思う。

夏草やつわものどもが夢のあと

俳人芭蕉の感懐である。荒れ果ててこそ戦火の跡か、語るべき言の葉もなく流れる雲に向って合掌瞑目する。

近くを流れる宜蘭川の堤防は美しく堅固に舗装され、川原の緑の芝草と共に公園の趣きである。西郷堤と呼ぶとのこと。当時（明治30年）宜蘭庁長であった西郷菊次郎（西郷南州の子）の治政を高く讃え、堤防の一角に立派な「徳政碑」が建っている。

戦火の跡は荒廃し、文明文化の跡は遺跡として守られ、継承されてゆく。人類社会の摂理であろうか。

翌4月23日、帰国の途につき、午後宮古島、豊旗の丘に到着した。時々小雨の降る中、特攻の碑前で慰霊祭を行う。

この丘には、陸軍歩兵第30聯隊、騎兵第28聯隊、北満より移駐した豊56 56部隊、豊旗の塔などに囲まれて、神風特攻の碑が建っていた。

「建碑の由来」に曰く、

「もう何も思うまい　もう何も思うまい　と思うほどこみ上げる父母への思慕　故郷の山河　今生の別れの瞼にうかぶ月影淡く　孤独を伴に無量の思いを抱き　唯ひたすら沖縄へ　この胸中いかにとやせん　あゝ壮絶の死　真に痛恨の極みなり

一九四五年七月二十九日夜半

神風特別攻撃隊第三次龍虎隊」とある。

そして碑面には

背を丸め深く倒せし操縦桿

千萬無量の思い今絶つ

神風特別攻撃隊第三次龍虎隊

と辞世の歌が刻まれている。

碑の台座正面には

上飛曹　三村　弘　一飛曹　庵　民男

一飛曹　近藤清忠　同　原　優

同　佐原正二郎　同　松田舜三

同　川平　誠

義烈七勇士は日本最後の特攻隊として世界恒久の平和を念じつゝ、ここ宮古島特攻前線基地を離陸、沖縄嘉手納沖に壮烈特攻散華す　その武勇萬世に燦たり　願はくば御霊安らかに眠られよ、父母のみむねに

一九九五年七月二十九日

生き残った第四次龍虎隊員たちの追悼である。

一同で般若心経を唱え香を供え、同行の石橋一歌さんが辞世の歌を献詠し、慰霊祭を終えた。

この後、更に宮古島内の慰霊碑、記念碑等を巡り、翌日は石垣島と続くのであるが一先ず擱筆する。

戦後59年、齢80前後の一同、記憶もうすくなった。何故もっと早くと口惜まれる。しかし59年前に共有体験した歴史を語り継ぐべきは私達に課せられた責務であり、慰霊の実践でもある。

命ある限りは――合掌

慰霊旅行を終えて想う

小久保　隆福

勝つ為に、勝てると思って始めた「戦い」であったかも知れない。たゞ勝たねばならぬ。勝てるであろうと信じて、信じこまさせられて始めた戦争であったのかも知れない。何時の間にか、殆んど全部の国民を「勝つ」と信じさせ協力させたかも知れない。

負けた場合どうなるのかは考えさせられなかった。敵を知り己を知って初めて勝利は得ることが出来る、と教えられて来た。海を制する者が勝てると思っていたのかも知れない。

が、「海」と「空」を制する者でなければ、相手を制することは出来なかったのである。大日本帝国は負けたのである。海も空も国土も凡てが征せられて負けたのである。

8月15日、皇居前の広場に土下座して嗚咽し慟哭もした。四海も人も、全部征せられているのである。

戦後59年、今も日本はアメリカに制せられ続けている。どうにもならない「祖国日本」となってしまったのである。

明治維新を機に発展充実し、諸外国にも劣らぬよう国を挙げて努力して来た。が、昭和20年8月15日から祖国はアメリカの支配下となり、列国からあなどられ続けている。未だに敗戦国は続いている。

美しい自然に恵まれた島国日本は、悠久の未来を信じ、日本国同胞が信じあいつゝ祖国愛に燃えて、親子兄弟、張合いを持ち、互いに信じあって生きて来たが今はもうない。もう一度、輝かしい、力強い日本は来るであろうか。

5千8百余人、突込んで征った陸海航空の特攻隊以下、水中、水上、空挺、戦車の勇士を初め、祖国日本の未来に夢と希望を抱き、信じて「一命」をお国に捧げた3百余万の靖国のみ柱、銃後の戦士として各職場を守り、殉じていった何万何千の国民の御霊等、いつの日報われるのであろうか。

亡くなった何百何十万の国民の一人一人、今生きて問いかける時何と応えてくれるのであろうか。弱冠22才の下級青年将校だった自分の胸に、今も残って生き続けている「問い」である。

本年4月、特攻隊員となり乍ら種々の事由で生き残った陸士、海兵、少飛、予科練出身の方々、父や兄、弟を特攻隊員として捧げられた遺族の方々と、台湾・宮古・石垣の各特攻隊発進基地の慰霊の旅は終った。

平成12年に知覧を始め九州各特攻隊基地を慰霊して廻り、一昨年は沖縄各地の特攻基地を巡拝慰霊した。参拝は各地に及び5ヶ年掛ってお参りした。

然し、未だ未だ終っていない霊地が沢山ある。今回の台湾にも嗚咽のこみあげる場所が沢山あった。

その一つ、昭和19年10月21日の台湾沖航空戦に於いて、米機と交戦被弾墜落時に、命を堵して村落上空を回避して、壮絶な戦死を遂げた日本海軍のパイロットが、「飛虎将軍」として崇め祀られていること、義愛公森川清次郎巡査の佐倉宗五郎の様な物語り、大正時代、不毛の土地であった嘉南中部、アジア一と言われた烏山頭ダムと、千600粁に及ぶ灌漑水路の建設に当って、最高責任者として農民達に慕われていた八田与一氏が、昭和17年徴用されて船でフィリピンに向う途中、米潜水艦の攻撃を受けて此の世を去り、3年後日本人は総べて台湾から去らなければならなかった時、御夫人は子供を残して、夫が心血を注いで作り上げたダムの放水口に身を投じ後を追った。との夫妻の記念館が今も残っているのを目の当りにして、思わず目頭が熱くなった。

お大師様が万濃池を作られた千200年前のことを追憶しながら、台湾を後にして那覇経由宮古島の慰霊へと移った。平良市、上野村、城辺町には13の慰霊碑があった。続いて石垣島でも陸軍白保飛行場跡、海軍北飛行場跡を巡り、伊舎堂中佐のお墓に詣でて一週間が終った。

毎年春には靖国神社へ桜花のもと参拝し、秋は世田谷の特攻平和観音堂へ参拝して慰霊を続けている。5年に亘った特攻基地慰霊旅行には、此の世田ヶ谷観音寺が貸して下さった香炉で焼香をした。私が持参した豊山輪ちがいの袈裟を首に掛けて、皆さんには法要をしてもらった。

今日、6月23日、沖縄慰霊の日。月光の曲で色々なことが追憶される夜空

花蓮飛行場

に、蛍が。知覧から飛んで来た様な気がする。私が被爆した広島の被爆者の霊を、全戦没者の霊を偲びつゝ筆を擱く。

新装成った花蓮空港ビル

特攻基地慰霊の旅

菱沼　俊雄

平成16年4月19日から1週間、私は〝台湾・宮古・石垣特攻隊発進基地慰霊旅行〟に参加し10数年振りで台湾を訪れた。戦後の台湾訪問は3度目。前回は昭和天皇崩御から半年、平成元年7月の飛行第108戦隊戦友会の仲間達との旅であった。

今回の台湾・沖縄の旅は私個人にとっても忘れ難い戦跡回想旅行と言える。昭和19年春、鉾田の教官から南方戦線に転出した軽爆の同期生5名は、飛行第34戦隊チモール派遣隊に赴任し、99双軽を翔ってチモール海、バンダ海の対潜哨戒に当っていたが、ルソン島リパに移駐し、戦隊が復帰した為、それぞれ他部隊に移籍した。大沢正弘は飛行第208戦隊に転属、薫空挺隊作戦でレイテ島に散華し、鈴木盛雄と私は飛行第108戦隊中隊長として台湾嘉義に転進した。

軽爆隊が殆ど無くなった為か、新設の108戦隊は意外にも輸送戦隊で、急降下爆撃隊の操縦者としては聊か心外であったが、台湾の嘉義・桃園を基地として比島・中南支・南西諸島への作戦空輸に精を出した20年春沖縄作戦の前後から宮古・石垣への空輸に重点が移り、沖縄作戦開始と共に、私の中隊は軽爆中隊に改編、特攻隊の誘導・戦果確認の任務を下命された。

20年4月22日17時、私は桃園飛行場を99双軽で離陸、台湾から沖縄に向う最初の特攻隊誠119飛行隊の2式複戦編隊を誘導し、19時半嘉手納湾附近の敵艦隊を捕捉したが、先頭の誘導機は忽ち敵の集中火網に包まれ充分な戦果確認が出来なかった。

2、3の火柱と、黒々と横たわる沖縄本島の海岸線にチカチカと砲火の瞬きを見て20分程旋回偵察した後、桟首を反転した。特攻機は編隊を解き、低空で敵艦隊に殺到、夕闇濃い海上に姿を消した。

この攻撃で誘導機は諸所に被弾、下げ翼や油圧系統の損傷で脚が下がり、速度が220粁／時に落ち、下げ翼も片開きとなった。台湾への帰航を断念した私は、月明の宮古島中飛行場に着陸し、28日の未明救援機で桃園に帰還、台北の第8飛行師団司令部で師団長や戦隊長に復命報告をした。

この度の台湾・沖縄旅行は正に私の60年前の軌跡を辿る旅とも言えるわけである。そして嬉しかった事の一つは軽爆の同期生松田陽一朗が参加したことだった。土佐出身の松田君は男性でも惚れぼれする程、若武者を思わせるひきしまった男性的な美丈夫であったが、鉾田で急降下爆撃訓練中の事故で顔面に重火傷を負いすっかり変貌してしまった。1週間、宿舎も同室、起居を共にし旧交を温めることが出来たが、軽爆の56期生も46名が現存8名に減ってしまった。

最後の聯合艦隊司令長官小沢治三郎中将の令嬢大穂孝子夫人を除く、一行17名は4月19日午前、成田を離陸、台北国際空港（桃園）に飛び、その夜は北投温泉に宿泊した。

昭和19年秋、比島に飛ぶ56期山本卓美の勤皇隊も、元航士生徒隊長・台湾軍参謀副長、北川潔水少将の計らいで北投温泉「佳山」に故国最後の夜を過ごし、私も特攻隊誘導から生還して、慰労の意味で「佳山」の1泊を許された。

19年の8月、比島から台湾の嘉義に新設の飛行第108戦隊に着任し、作戦に応じて基地も、塩水・桃園・彰化と移ったが、21年2月末復員までの1年7ヶ月を過ごした台湾の思い出は悲喜交々、限りなく懐かしい。

中でも忘れ難いのは終戦の日。20年4月、99双軽で特攻隊誘導任務を果たした縁で、菱沼中隊は軽爆中隊に改編され、7月1日、12機の99双軽は白昼堂々の大編隊を組み、意気揚揚、桃園から彰化の飛行場に転進した。

実の所、沖縄の失陥後、比島・支那からのB24・B29の定期便も台湾上空には殆ど現われなくなっていたのである。

台北・桃園の戦隊主力から離れた私の中隊は彰化に移駐し、台中の独立第25飛行団長の指揮下に入ったが、彰化

飛行場駐留部隊の諸隊長では新品大尉の私が先任者だったので飛行場司令官をも兼任することとなった。

22歳の若造にとっては大変な重任だったが、年齢を考えたことはなかった。そして迎えた8月15日。オンボロ・ラジオで聞いた玉音放送は雑音が多く殆ど聞き取れない状況だった。

諸隊からの問い合わせが相次ぎ、師団や飛行団からの連絡も取れず、焦燥の半日を過ごした私は、明朝未明、独断で沖縄の敵艦隊に特攻を決意し、中隊の可動双軽全機に爆装を命じた。

上司よりの命令も無く、突然の終戦事態を敵の謀略若しくは君側の奸の策謀と受取った私は、和戦いづれにしても驕敵と差し違えて一矢を報いたいと念じたのである。

私は中隊全員を集めて〝軽挙妄動を慎み、別命あるまで待機せよ〟と訓示し、将校・古参下士官達と協議したが、全員が積極的に沖縄攻撃を支持し、各機操縦者1名で足りると考えていた私に、〝是非お供させて下さい〟と、整備兵や事務の下士官までが続々と申し出て来た。

其の夜は、彰化飛行場から程近い、鹿港の軍人会館で中隊幹部と別れの宴を張ったが、如何なる運命の悪戯か、夜の9時頃、事務の古参曹長が飛びこんで来て「只今、首相の放送がありました。〝戦争は終っていない。最後まで敢闘せよ〟と言われました。」と報告。一同は歓声を上げて「やっぱり敵の謀略だ。日本が敗けてたまるか。そーれ、飲み直しだ」と益々宴が盛り上った。

私も「これで安心して死ねる」と心底から嬉しく、宿舎に帰ってぐっすりと寝込んでしまった。

そして翌朝目覚めた時、当番兵の持参した新聞を見て、我が目を疑った。大見出しで終戦の事実を報じていたのである。最早日は高く、攻撃の機を失し、しかも聖断の下った今、出撃の大義名分も立たず、私は涙を呑んで攻撃を中止せざるを得なくなっていた。

呆然として飛行場の一隅に立ちつくし、見はるかす台湾山脈の連嶺は青く聳え立ち、明るい緑に輝く飛行場の草原の傍道を、台湾笠をかぶった少女が、水牛の背に揺られながら、鞭を振り振り、鷺鳥の群れを追っていた。

すべてがいつもと変らぬ長閑な風景であった。私はいまもこの平和な情景を鮮やかに想い出す。

彼の日から茫々59年、北投の1夜を明かした一行は、松山から高雄に飛び、台南に第2泊。更に高雄から花蓮に飛んで第3泊。アミ族の踊りを見たり各地の戦跡を訪ね、汽車行で宜蘭から台北に戻り桃園で第4泊。そして4月23日朝、桃園を離陸、那覇で乗換えて14時半、宮古島空港（旧海軍飛行場）に到着した。昭和20年4月22日夜、被弾して宮古の中飛行場に不時着した時から丁度59年が経っていた。

その中飛行場に立って往時を偲ぶ間もなく、島内を1周、東端の東平安名（アガリヘンナ）岬で右手に拡がる太平洋と左手に東シナ海を望む360度の雄景を堪能したが、手前の北東海岸に程近い路傍に1つの石碑を見つけた。

銀杏の葉のような形のベージュ色の石面に「不時着の地　記念碑」と黒色の文字が刻まれ、台石に嵌め込まれた黒色の石板に白い字で由来が記されていた。

『一九四二（昭和一七）年一月二十四日、日本軍の九九式襲撃機が六機編隊で宮古島上空を飛行中、通信兵と二人乗りの隊長機にエンジントラブルが発生、この地に不時着した。岐阜県の各務原を飛び立ち沖縄本島経由で台湾・フィリピン方面へ飛行機の輸送任務中のことであった。

当時この地は、起伏が激しく、わずかな平地を捜して着陸はしたが、修理後の離陸を困難と判断した小田泰治機長（当時陸軍中尉二十二歳）は、滑走路作りの協力を城辺村長に要請した。これに応え、島内児童生徒・老若男女

宮古中飛行場跡にて

小田泰造中尉不時着記念碑

が連日作業に当たり、一ヶ月後には約幅三十メートル長さ三百メートルの手作り滑走路が完成、飛行機を無事離陸させた。五十五年後「おかげで任務が遂行できた」と小田機長が来島した際この現場を確認した。

ここに宮古島の子供たちをはじめ住民の親切・協力心をたたえ、小田機長の感謝の意を永久に伝えるために、記念碑を建立する。

一九九七（平成九）年六月吉日』

※城辺村

私の宮古島訪問は、台湾と同じく戦後3度目になるが、此の記念碑の建立式に招待された日本航空の先輩小田機長から同行を誘われたことがある。

大分前に、戦後初めて宮古島を訪れた時、上砂振りの豪雨の中を親切に案内してくれた上野村の職員が課長に昇格し、以後文通が続いたが、小田機長の誘いよりも何ヶ月か早く、村の創立記念日に私への招待状が届いて2度目の宮古山飛行場跡訪問を済ませた所だったので残念ながら同行を辞退した。

沖縄本島は九州の南端からも、台湾北部からも700粁の位置にあり、戦闘機の行動半径を超えて、丁度人の背中の中央部のように上からも下からも手の届かない部位にあったので、必然的に片道燃料の特攻作戦を採用せざるを得なかったものと思われる。

そして特攻基地（出撃隊数）としては、第6航空軍（軍司令官菅原道大中将・福岡）が南九州の知覧（52隊）・徳之島（5隊）・喜界島（5隊）・都城東（10隊）・万世（16隊）・福岡（1隊）・鹿屋（1隊）・熊本（4隊）を、また第8飛行師団（師団長山本健児中将・台北）が台湾の台中（5隊）・花蓮港（4隊）・八塊（7隊）・桃園（3隊）・宜蘭（4隊）・龍潭（1隊）、九州の新田原（5隊）・徳之島（1隊）・宮古島（2隊）・沖縄中（3隊）・石垣島（4隊）を使用したが、一部の特攻隊は複数の前進基地を併用したので、出撃特攻隊の総数は括弧内の合計数より少ない。

今回の慰霊旅行では桃園から新竹・龍潭・八塊（八徳）・台北（松山）・高雄・屏東・台南・岡山・花蓮・宜蘭・那覇・宮古島・石垣島の各飛行場跡を訪ね、桃園神社・飛虎将軍廟・高雄忠烈祠（護国神社）にも参拝して往時を偲び、私個人は帰途、沖縄に立寄り讀谷山の北飛行場滑走路にも立って見た。因みに戦時中、沖縄本島の北・中（嘉手納）・南（那覇）の各飛行場を使用したが、最後に北飛行場を飛び立ったのは昭和20年3月14日、敵上陸の2週間前であった。

また敵沖縄上陸後の5月10日夜、作戦空輸で桃園から石垣東（白保）飛行場に飛び、20時半頃、着陸すると、第9飛行団長柳本榮喜中佐がわざわざ出迎えて、「御苦労さんです」と慰労の言葉をかけられた。

欲を言えば、台湾で飛行第108戦隊開隊の地嘉義や、台中、また終戦の地彰化にも寄りたかったが、特攻基地では無かったので止むを得なかったと思う。59年前の想い出が走馬灯のように脳裡を駆け廻り、私の80年の生涯では最も忘れ難い、そして意義深い旅行となった。

慰霊の旅に参加して

渋谷　多平

4月19日より25日の7日間、台湾各地、宮古、石垣島の特攻隊発進基地の慰霊の旅に参加した。本年で3回目の慰霊の旅（フィリッピン・沖縄・台湾）になるが、毎年参加するたびに感ずることは、特攻隊の出撃を実際に体験した方々が年と共に体調不良、歩行困難等で減少していることである。誠に残念な事で、吾々実戦を知らない者はこれら経験者の話を正確に後世に伝えなければならない義務があると信じている。読書等による特攻隊の真実と、経験者の生の声を永遠に後世に伝えなければ後に続く者を信じて散華した英霊に対し申訳ない。慰霊の場所のたびにお経を唱えお線香を供え口を閉じて拝礼していると、いつも涙がこみ上げてくるのは私だけではないと思う。また今回の旅で心に残ったのは特攻隊ではないが、台湾で神と祭られた日本軍人杉浦茂峰海軍少尉の鎮安堂「飛虎将軍廟」であった。台南市にある飛虎将軍廟の説明によれば、アメリカ軍の台南来襲の際、零戦で邀撃した杉浦機は無念にも敵弾を受けて尾翼より発火し爆発が寸時に迫った杉浦機は部落（海尾寮という大部落）目がけて急降下の最中、今飛び降りたら自分は助かるかも知れない、しかし竹や木で出来た何百戸と云う家屋は一旦火が着くとすぐ焼かれるだろうし……こう判断した杉浦機は突然上昇して部落の東に飛び去ったが空中爆発した。杉浦兵曹長は落下傘で飛び下りたが、不幸にしてグラマンの機銃掃射を浴びて落下傘は破れ、地面に叩きこまれ壮絶な戦死を遂げた。この杉浦海軍少尉を祭ったのが飛虎将軍廟で「飛虎」とは空を飛ぶの意味。「将軍」とは神として祭られる男士の尊称とのことだそうである。そして廟守は朝夕2回タバコを7本点火して捧

げ日本の国家「君が代」、午後は海ゆかばを粛粛と歌うとのこと。廟守の若者が日本語の達筆で「若鷲の歌」の書いた紙片を呉れたのが印象的であった。私達はもっともっと長生きをして慰霊を続けながら、今エネルギーを持て余している若者に同年代で散華した特攻隊の話を伝えなければならないと常に思っている、百聞は一見にしかずこれら若者を知覧に連れて行くのが一番の近道ではないだろうか、そして青春時代のすべてを捨てて国に殉じた特攻の崇高な精神のひとかけらでもよいから胸に秘めることが出来たら幸甚の至りである。

衛兵交替が終って（台北忠烈祠）

中山大飯店

鎮安堂・飛虎将軍廟について

近堂　純司

「飛虎将軍」と呼ばれる杉浦兵曹長は、種々の説があるが、真相は次のようである。

一、出身は丙種予科練（海軍に入隊していて、部内選抜で短期間に基礎教育を終了、搭乗員になる）の六期で当時上等飛行兵曹、戦死後兵曹長に昇進（陸軍の准尉に相当）。

二、昭和19年10月12日、「台湾沖航空戦」で、台湾の海軍航空隊では、新竹空で午前6時20分、新竹上空哨戒の為、零戦4機発進。新竹東北5キロメートル上空で、午前7時20分、グラマンと空戦。その10分前には零戦33機発進し、台北上空3千メートルで反転、新竹基地方面に飛行中、桃園上空（現在、蔣介石国際空港あたり）で空戦。一方、高雄空（当時の岡山街、現在は飛行機展示場、史料館、空軍軍官学校）と台南空（現台南空港）から、午前7時20分、37機が発進、迎撃。

こうして、桃園、後竜（共に当時は新竹州）、台南、高雄上空で激しい空戦で、撃墜17機の戦果をあげたが、我が方も、新竹空17機未帰還、落下傘降下2、高尾空未帰還9、台南空未帰還4であった。

三、台南でこの空戦の一部始終を見ていたのが、呉省事氏と呉江池氏の他にも何人かいたらしい。平成15年10月に訪れた時、もう4年余り前に2人ともご逝去と聞き、江池氏とは詳しい話もし、一緒に写真を撮り、親しくしていただいたので、落胆した。

この空戦で、体当りした零戦があった。（機銃故障か全弾撃ち尽したか不明であるが）、右翼は前方へ直進、呉省事氏の畑に何か落ちたので、急ぎ近づくと、搭乗員の下半身で、飛行靴に「杉浦」と書いてあり、近くの畑にも2機が墜落したという。3日後に、航空隊と警察が遺体を引き取りに来たという。

他の2名は平成11年、堂守の呉江池氏の依頼により、海原会の杉田理事（現副会長）の調査で西垣兵曹長と田口（階級不詳）操縦士と判明した。

四、呉江池氏の話では、昭和30年近くになって（よく事件後間もなくと書かれているが）、毎夜半に白い帽子、白い服を着た者（2種軍装か、事業服かと確認したが、海軍士官でも飛行服でもない。単に白い物が動いていたという）が、墜落地点の近くの魚の養殖場を歩いているのを見た。魚を盗みに来たのかと、近づくと人影が消える。このような経験をした人が多くなり、噂が広まったので、占師に占ってもらうと、当時の戦死者の亡霊だとのこと。噂が鎮まらないので、呉省事氏は自分の5坪の土地に廟を建て、毎日お祈りをした。そうすると、部落の稲作も豊作、養豚や魚の養殖も順調で、次第に信者が増え、線香の煙も絶え間なく、その他にも霊験あらたかな為、平成4年に神像を3体作り、報恩の為に現在の30坪の新しい廟を、多くの信者

の協力により建立した。その1つが杉浦兵曹長（祭神）であり、他の2つは、前述した如く同時刻頃附近に落下した西垣兵曹長と田口操縦士である。この3体の祭神を「飛虎将軍」と称し、廟名を「鎮安堂」とした。飛虎とは戦闘機であり、下士官ではあるが、偉大な戦死者ということで、将軍と呼ぶ。

五、この廟の祭祀者（堂守）が呉江池氏であった。午前7時と午後4時にバーナーで煙草に点火し、神像と写真の前に捧げ、祝詞を奏上する。祝詞は「君が代」であり、午後4時は「海ゆかば」である。正午には「若い血潮の予科練の」と、「若鷲の歌」がテープで流れる。日本の神職の奏上する祝詞より、我々には分かり易い。私はあれこれ質問し、高雄中学校同窓会報に投稿した。

六、杉浦兵曹長が海尾寮部落に火災を起こさせない様に、機首を上げて海岸方向に向ったと云う説は誤まりで、養魚場の所在地は安平（アピン）である。海尾寮からは車で約20分、台南市の西南方に位置している。

私の聞いた範囲では海尾寮上空で、我が零戦が機首を上げて海に墜落したという話も本当では無いらしい。

では誰が火を吹いて海へ墜ちたのか。それは本号別掲の私の旅行報告記の中で触れた、故岩井利造兵曹長（特乙1期、大阪硝子社長、平成15年7月28日逝去）である。岩井兵曹長は当日、新竹空を午前7時10分に発進、被弾して操縦不自由な零戦を、どうにか基地に着陸させ、塩水流隊（ヒトシ）長に報告し待機中、午前9時10分、予備機3機の中の1機に搭乗し、空戦中全弾を撃ち尽し、体当りしようと目の前の1機を追いかけた。スピードと馬力に劣り追いつけないが、もう少し、もう少しと思っていたら、「グワン、グワン」と強烈なショックを受け、一瞬後を見ると、尾部から黒煙を曳いていた。敵を見失うし、高度もドンドン下って行く。「落下傘で飛び降りよう」、と風防を開けると、機体の下を這っていたガソリンの火が、風防を開けた為に、座席を通って風防の方に抜け、忽ち座席は火の海となり、これで死ぬのかと思った瞬間、物心ついてから、記憶に焼きついている事が、走馬燈の様に通りすぎた。夢中で、バンドを外したらしく外に放り出され、すぐに海に落ちた。海面に顔を出すと、真白な落下傘が波間に横たわっていた。岸が見えていたので、必死に泳ぎ着いて、再び一命を取り止めたと思った。その後、顔面や手足の火傷の為、内地の病院に送還され、半年間の病院生活を送ったと云う。何時か零戦会の席上で「飛虎将軍になっていますよ」と、詳しく話すと、「私が墜されたのを見ていた人があったんでしょう」と笑っていた。岩井さんの手記もある。温厚な人格者であった。

七、杉浦兵曹長発進は、午前7時20分である。高雄空から発進して空戦開始時刻は不明だが、体当りして機体諸共肉体まで粉々に散った。一方岩井兵曹長は、2度目の新竹空発進が午前9時10分である。その時間帯には、もう杉浦兵曹長は体当りして戦死している。巷間語られている尾翼から発火して海へ墜ちたという説は、岩井兵曹長機が胴体燃料タンクを射抜かれた、との話と一致する。そして海へ墜ちている。だが、繰り返すが、台南ではこれを見たという人はいない。岩井兵曹長機は「後竜」沖であるらしい。私の知る範囲では、台湾西海岸の海軍航空隊は、比較的海岸近くにあった。

八、多くの人が夢をみた、との説も私が聞いた事と反対である。呉江池氏によると、『省事が夢の中で杉浦兵曹長が、「最近の台湾の青少年は殆どがダラシない。でもまだ一部に見込みのある者もいる。私のことを映画にしなさい」と語ったという』。そこで資金集めを始めたとか。廟に向って左側の庇の下に、約1米80糎、直径80糎の円柱の貯金箱があったが、今は箱が内部にある。

九、江池氏と話した平成10年7月、最近日本人もボツボツ来るようになった、とのことであった。一説によれば、日本人がひきりなしに参詣する、と聞くが、そうあってほしいと思う。彼の歌う「君が代」「海ゆかば」は、堂々として腹の底からの聲で、体格もガッチリとしており、一緒に歌う私の方が恥かしかった。

以上、まだまだ説明したい事も多々あるが、誤り伝えられる理由を考えてみると、私の高雄中学校の台湾人同窓生は勿論、高砂族を含めて、台湾人の多くが今尚、日本を祖国のように思い、単に親日的と軽く表現するのは、台湾人に対して無礼かと思える程、特に高令者ほど日本人以上に日本を愛し、日本人らしい人が多い。故に、祖国の為に一身を犠牲にして、困難に殉じた若人の、その純潔を讃える意味での美談である。と思わざるを得ない。たかだか60年前の事であり、当時、いやその日に共に戦った人も、まだご健在であ

ろうから、手記などで誤り伝えられないよう願うものである。

註

60号の報告記（上）で、多くの方が飛虎将軍廟のことに触れておられるし、本号（下）に於いても同様で、現地住民の方々の暖かい心に、参加者皆さんの心の琴線が、深く揺り動かされた結果であろうと思われます。

処が、その内容は必ずしも一致せず、宿舎から飛虎将軍廟に至るバスの車内で、近堂純司氏から説明を受けましたが、メモは取れず、更に観光案内書によっても記述内容に混乱が見られましたので、改めて近堂氏に飛虎将軍廟に関して直接の投稿をお願いした次第であります。

（菅原道熙）

「台湾に息づく中華伝統文化」より［哲学思想］

中華民国を訪れた外国人は、生活様式の違い、独特な文化的色彩を目の当たりにすると、誰しも驚きの気持ちでいっぱいになる。その奥義を理解したいと思うならば、まずは中国文化の中に生きる哲学精神の真髄を知る必要がある。

中国は5000年の歴史と文化を持つ民族国家である。この悠久の歴史の中で、13もの王朝が生まれては消えていった。どの時代の王朝にも専従の「史官」といわれる歴史担当の官吏がおり、政治・経済・社会・教育などの文化活動を記録し、現在のいわゆる「二十五史」を編纂してきた。この長い歴史の間、中国人は漢民族を主体に、まわりの民族と、文化の上でも血統の上でも融和を進めていった。防御以外、必要以上に武力による征服の手段を用いることは非常に少なかったからである。それゆえに、中国の歴史と文化の伝統には、「歴史の継続性」と「文化の包容性」がはっきりと現れている。一方、中国の哲学思想には、古くから「諸子百家」といわれるものがあった。その中でもっとも有名なのが、儒家・道家・墨家・名家・法家である。中古以降、「玄学（老荘の哲学）」と「仏学（仏教に関する学問）」も生まれた。「仏学」には有名な「禅宗」のほか、数多くの宗派が存在した。西暦1000年以降、中国の宋の時代には「新儒学」もおこり、600年余りにわたり発展し続けた。儒学、仏学、新儒学は、中国の周囲の国々、たとえば日本、韓国、ベトナムなどにも大きな影響を及ぼした。中国の文化と哲学思想は、たいへんに豊かである。こうした「歴史の継続性」「文化の包容性」「思想の豊かさ」こそが、中国の文化伝統の重要な特徴なのである。

中国のほとんどの哲学者は、「天道」と「人道」を重くみている。「天」とは、単なる「天地自然の天」ではなく、生命と人生の価値との全ての根源としてとらえられているのである。天は宇宙であり、生命の創造力に満ちあふれた有機体である。しかも、生命の創造は単に物質的、機械的なプロセスではなく、精神的で目的を持ったものなのである。言い換えれば、「天」は休むことなく、更に新しく、更に智恵のある生き物を作り出している。それがつまり、人間である。人間は天から授かった知恵と徳性によって、さらに優れた精緻な文化と文化的価値を作り出していく。新しい生命と新しい価値は、宇宙と人間社会の中に絶えず湧き出てくる。前者を「生生」と称し、後者を「蕃性」と称し、あわせて「天人合一（人の言行が正しければ天の意志と合致する）」、あるいは「天人合徳」と称している。

このような哲学思想は、儒家及び新儒家が主に提唱したものである。また、「道家」と「仏家」の思想も同様だ。ただ、それぞれの文化的価値観は異なっている。儒家は「倫理的な価値」を、道家は「芸術的価値」を、「仏家」は「宗教的価値」を重んじている。

「天人合一」という哲学思想は、中国人の「天命を楽しみ、分に安んずる」という人生観を育んできた。それによって中国人は、更に身近に自然界における無限の心地よさを体験できるようになった。また、倫理の世界にある豊かな情を深く享受し、それほど不満もなく仕事に精出すことができるようになった。人間の仕事はつまり天の仕事。こう考えることによって、宗教的な慰めを得ることができたのである。

「生生之徳」「天人合一」という生命哲学によって、中国人は人間の倫理的な情感である「仁」を重んじ、その一方で、社会秩序と人間の道理にかなった行動規範である「礼」を重んじるようになった。「仁」とは、人間の先天的な道徳感情であり、広い無私の愛である。心の内から自然にあふれてくるものであり、豊かであればあるほどよい。すなわち「博愛之を仁という」。「礼」とは、人間の理性的な考えであり、自己規制である。そのめざすものは、社会の倫理秩序を守り、集団生活の共同発展を促進させることである。これは慎み深いほどよい。「仁」と「礼」、この二者は分かちがたい。どちらも人が生まれながらに持っているものであり、互いに補い合って発展し、孝行・思いやり・信義などの美徳を形成しているのである。